

文明

Civilizations

東海大学文明研究所

Institute of Civilization Research, Tokai University

No.36 2025

iii

アンデスの笛吹きボトルをめぐる
吉田晃章

1

文明論の系譜(1)～東海大学文明研究所と文明論
平野葉一, 服部泰, 中村朋子, 渡辺青

19

パドヴァ司教ヤコポ・ゼーノと「建築的扉絵」
松下真記



文明
Civilizations

No.36 **2025**

東海大学文明研究所

アンデスの笛吹きボトルをめぐって

文学部文明学科教授

吉田 晃章

筆者は、これまで文明研究所が所蔵するアンデス・コレクションの研究に携わってきた。笛吹きボトル (whistling bottle) とは、土器内部に笛玉が設置された内部構造が比較的複雑な土器で、土器の内部で水と空気が移動することで音が生じる。この土器はアンデス文明で少なくとも 2000 年以上にわたって制作され続けてきた。東海大学では 52 点の笛吹きボトルを所蔵するが、すべて動物や人物が象られている。水の入った土器を一方に傾けるとピーという音が鳴り、もう一方に傾けると笛玉からは息を吸うような音が出る。共同研究者らと視覚支援学校を中心に笛吹きボトル制作ワークショップを展開してきたが、子供たちに笛の音を聴かせると人の寝息のように聞こえると言った感想も出る。アンデス世界でかつて笛吹きボトルが、生き者と関連付けて捉えられてきたからこそ、動物や人物が象られていたと筆者は考えていた。国内コレクションを対象とする研究では、点数や文化的多様性の両面で限界があり、より多様で大規模な資料群を調査する必要性が生じていた。そのため、2025 年はペルーとエクアドルの複数の博物館で現地調査を実施した。2 月にはペルー天野プレコロンビアン織物博物館を中心に、様々な笛吹きボトルを観察してきた。やはり、動物や人物が象られていた。しかし、8 月エクアドルの首都キトのカサ・デ・アラバド先コロンブス期美術館 (Museo De Arte Precolombino Casa del Alabado) では、サッカーボールのような幾何学的形態の胴部をもつ笛吹きボトルを目にし、愕然とした。浅学からくる考察と認識を覆された思いであった。笛吹きボトルを生み出した先住民の思考とはいかなるものであったのだろうか。

ところで日本漢字能力検定協会が主催する「今年の漢字」は、例年通り清水寺において発表された。2025 年を象徴する一字は「熊」であった。確かに 2025 年、日本国内ではクマによる人身被害が例年を大幅に上回った。環境省の公表によると、11 月末日時点で、死者 13 人、負傷者は 230 人 (4 月～11 月) に達しており¹、事態を重く見た自治体、政府が対応に追われ、社会的関心も急速に高まった。秋田県林業研究研修センターの長期調査では、堅果類の豊凶周期が、2013 年以降短縮していることが明らかになっている²。同センター環境経営部の和田覚部長は、豊作の年の冬には栄養を蓄えた母グマの出産が増えるとし、豊作の周期が短くなったことでクマの個体数が増加している可能性がある³と説明している。豊作年の増加は個体数の増大を促す一方、不作年には深刻な食料不足を招き、人里への出没を誘発する。結果として不幸な遭遇や駆除の増加を招いている。この「実りのサイクル」の変調は、気候変動を含む人為的要因と無関係ではないと考えられる。すなわち、クマ問題は単なる野生動物管理の問題ではなく、人類の活動が生態系に及ぼす影響の帰結として理解されるべき現象なのだろう。

そもそもクマは、近代以前においては「害獣」ではなかった。日本で山の民であるマタギ

やアイヌにとって、クマは神の使いであり、あるいは神そのものであった。日本でも古くから狩猟の対象でありながら、殺されたクマの魂は手厚くもてなされ、儀礼を通じて魂は送り返された。昨今のクマ騒動で中沢新一氏の著書『熊から王へ』³が思い出された。クマが生息する北米でも同様で、北米インディアンも狩ったクマの魂を丁重にもてなした。クマは巢穴（家）に帰ると毛皮を脱いで、人間と同じように暮らすと考えられた。人前では語らぬ者も、人間の見ていないところでは親子で語り、笑い、コミュニケーションを取っている。つまり、「語らない動物たち」もすべて人間のような存在であり、人間と同じように文化を持っているとされた。

ブラジルの人類学者であるヴィヴェイロス・デ・カストロは、アマゾン先住民の世界観では、人間だけでなく動物や精霊もまた、自分自身のことを「人間」として認識しているとしている。すべての存在は、社会構造や親族関係、文化を共有しており、それぞれが持つ「身体」の違いによって、見えている世界（自然）が異なるという考えを示した。言い換えれば、文化が一つで自然が多様であるというこの逆転した発想は、「語らないもの」を単なる客体として扱ってきた近代的自然観に根本的な問いを投げかける。ただし、ヴィヴェイロスは主体と客体との「輪郭を消してしまうのではなく、それらを折りたたんで稠密化し、虹色にして輝かせ、回析させねばならない。」⁴という。

アマゾン川河口に近い都市ベレンで、11月10日から21日にかけて、国連の気候変動枠組み第30回条約締約国会議（以下、COP30）が開催された。消失の危機に瀕するアマゾンを抱える地での開催は象徴的であったが、特に途上国向けの気候変動対策の資金支援の拡大や、気候災害への適応策（カバー策）強化に関する合意が形成されたものの、脱炭素の具体的なロードマップ策定については合意に至らず、多くの課題が残った⁵。カバー決定は「グローバル・ムチラオ決定」とも称された。「ムチラオ（Mutirão）」とはポルトガル語で「多くの人が共通の目的のために実施する共同作業や協働」を意味するが、枠組みの背後で、先住民の声は依然として十分に届いていない。連日、デモなどを通じて、環境保護と権利保障を訴えていた。「大豆はもうたくさん」「アマゾンを守ると約束したが、その守護者を守ることは忘れている」と⁶。「語らぬ森」の声を聴くべきだという彼らの訴えは、文明社会に対する根源的な批判である。アマゾンで消滅する熱帯雨林を見ても、文明系が拡大するとともに生態系が蝕まれてきたことは火を見るよりも明らかである。

他方、アメリカ合衆国のドナルド・トランプ大統領はCOP30の約2か月前、9月23日の第80回国連総会の一般討論演説で、カーボンフットプリントは「でっち上げ（hoax）」で資金拠出は「詐欺（scam）」だとして、気候変動対策（地球温暖化）を非難し⁷、COP30にも参加しなかった。排外的ファースト主義とフェイク情報が蔓延する現代社会は、「話せる者」だけが中心に構築され、「語らない、もしくは語れない存在」を周縁化する。クマのフェイク画像が拡散される日本社会も、その例外ではない。日本を取り巻く状況も、他国と変わらず、ファースト主義が流行し、日本初の女性首相の台湾有事発言で日中関係は冷え込んでいる。「熊猫（パンダ）」は予定通り中国に返還されるが、家永真幸教授（東京女子大学）は外交政策のツールとして「熊猫」がやり取りされるのではなく、「パンダファースト」を主張する⁸。

かつて人類の歴史は、生態系から文明系への歴史であると捉えたのは、文明学者・梅棹忠夫であった⁹。人間は装置・制度系を生態系の中に生み出して、自然の中に文明を生み出し

てきた。ある人々が生み出した装置・制度系の外にいるものは、かつては自然であり、同じ容姿であっても、動物であり家畜にもなった。アメリカ大陸の歴史では、文明系の外にいるものを徹底的に他者化＝自然化し、抹消した歴史があった¹⁰。長い歴史をへて、人種や先住の如何にかかわらず、対象を拡大し基本的な権利が与えられてきた。ただし、もはや文明系に属するものだけに生存の権利を与えるだけでは、不十分であろう。生態系に属する者たちの生存の権利なくして、言い換えれば生態系の存続なくして文明系の未来はない。人新世において、文明系は生態系の未来を左右するほどに膨張し、「語らない存在」に対しても責任を負う段階に入っている。2021年に国連がまとめた報告書“Making Peace with Nature（自然との共存）”¹¹では連関する3つの環境危機が述べられた。気候変動、生物多様性の喪失、環境汚染がそれである。そろそろ種をも超えた他者排斥と「話せる生き物」が中心となる世界を見直し、人間、動物、植物、自然環境、敷衍すれば「語らないもの」へと生存の権利を拡大していかなければならないだろう。

話しは笛吹きボトル研究に戻るが、象形された動物と動物以外をいつの間にか線引きし、生物だけに魂が宿るという認識に筆者自身が囚われていた。体内に水を貯え、空気を出し入れする笛吹きボトルは、どこかで人間や動物が象られなければならないとする近代的自然観に苛まれていた。斯く言う筆者自身が、先住民のまなざしを見失っていた。クマ騒動と多自然主義をめぐる、精霊が語り、森が語る世界では、精魂を込めて創り出した幾何学的な形状の土器が音を出し、語っても何ら不思議ではないと再考する機会となった。クマが多く出没した東北の一部には、草木を供養する草木塔まで存在する。人間以外の生物や自然環境がファーストになる時代を創造することはできないものだろうか。

*本稿執筆後、アメリカ合衆国によるベネズエラ攻撃、さらにイスラエルとアメリカ合衆国によるイラン攻撃という事態が生じた。ロシアによるウクライナ侵攻も含め、国際社会は、強い力をもつ「語る」主体が前面に立つ世界であり、対立が常態化する状況にある。そうした中で、「語らないもの」あるいは「語れないもの」とどのように向き合うのかという問いの重要性を、あらためて痛感している。

注

- 1 環境省「クマ類による人身被害について [速報値]」
URL：<chrome-extension://efaidnbmnnnibpca jpcglclefindmkaj/https://www.env.go.jp/nature/choju/effort/effort12/r07injury-qe.pdf>（最終閲覧日 2025/12/24）
- 2 日本経済新聞社、「クマの餌・ブナの実 2027年も凶作？ 秋田県が周期調査、出没を警戒」2025年11月30日、URL：<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUD2927V0Z21C25A1000000/>。
- 3 中沢新一『熊から王へ』、講談社、2002。
- 4 エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロ『食人の形而上学』（檜垣立哉・山崎吾郎訳）、p.23、洛北出版、2015。
- 5 環境省「国連気候変動枠組条約第30回締約国会議（結果）」2025年11月25日、
URL：https://www.env.go.jp/press/press_01793.html。
- 6 朝日新聞デジタル「(COP30パリ協定10年)現地から：下「アマゾンの守護者、忘れるな」先住民デモ船上で街中で」2025/12/11、URL:<https://www.asahi.com/articles/DA3S16362368.html>。
- 7 Donald J. Trump “Remarks to the United Nations General Assembly in New York City”, 2025/9/23,

URL: <https://www.astrid-online.it/static/upload/trum/0001/trump-un-23-9-25.pdf>.

- 8 家永真幸「パンダなぜ返還、「ゼロの日」来る？歴史に見る中国の狙い」時事ドットコム、2025/6/19、
URL: <https://www.jiji.com/jc/v8?id=202506panda-team>。
- 9 梅棹忠夫『文明学の構築のために』、中央公論社、1981。
- 10 清水透「「他者化・自然化」をめぐる」、『ラテンアメリカからの問いかけ』西川長夫・原毅彦編、
pp.75-90、人文書院、2000年。
- 11 UNEP “Making Peace with Nature（自然との共）”，2021/2/18,
URL: <https://wedocs.unep.org/xmlui/bitstream/handle/20.500.11822/34948/MPN.pdf>.

「文明論の系譜 (1) ～東海大学文明研究所と文明論」

平野 葉一¹, 服部 泰², 中村 朋子¹, 渡辺 青¹

¹ 東海大学文明研究所研究員

² 東海大学観光学部, 東海大学文明研究所所員

〔論文〕

Abstract

Modern civilization faces various crises. While solutions to each of these crises are being explored, it is also meaningful to reconsider the nature of civilization as a spiritual foundation to overcome them. The core project of the Institute of Civilization Research, Tokai University, has been exploring a part of the genealogy of thought and philosophy that has questioned the nature of civilization to this day. Tokai University is a research and educational institution that values and explores civilization. The Institute of Civilization Research, in particular, was established from the university's inception as an institution dedicated to addressing issues of civilization. This series of studies focus on three civilization theorists who have played a central role in the Institute's research into civilization, and aims to unravel their theories of civilization from the perspectives of thought and philosophy. As a first step, this paper focuses on the founding of Tokai University and the establishment of the Institute for Civilization Research, and introduces the research conducted there. In particular, it clarifies how this research of civilization has been conducted based on a synthesis of academic disciplines and examines the need for synthetic body of knowledge—one aspect of which is "Trans-disciplinary Humanities."

謝辞

本稿の執筆に当たっては東海大学学園史資料センターに保存されている東海大学文明研究所『所報』（1987年～1991年に限って発行された版）を参照させていただいた。当センターのご理解とご協力に心から感謝の意を表する。

1. はじめに

文明は人間営為の総体と捉えられる。蓋し文明研究は人間営為延いては人間存在そのものを研究することに他ならない。古代ギリシアといった特定の時代、地域も文明研究の対象となるし（古代ギリシア文明）、地中海のように特定の地域における通時的展開も然りである（地中海文明）。他方で、今日の文明が科学技術文明と捉えられるのは科学技術の所産が人類のほぼ全体を外延的に凌駕し、善かれ悪しかれ地球規模で人々の生活に影響を与えていることを意味する。そこには人々の伝統・習慣や宗教、法や社会制度、インフ

ラストラクチャーなどが内包され、同時に民族的、地域的価値意識や文化営為も見出される。したがって、文明研究は、人間生活を構成する物質的な外的側面に加えて人間を存在せしめる精神性といった内的側面を対象とし、これらが絡み合いながら社会を構築してきた人間の歩みを顧み、そこから現状を省察することになる。さらに、その検討が次の世界への道標となるべく未来を志向するところに文明研究の意義が認められる。

東海大学文明研究所では、これまでコア・プロジェクトとして人文学を基礎に文明研究を進めてきた。具体的には2020年度から「超領域人文学の構築」、2023年度から「人新世（Anthropocene）における人文知」をテーマに、今日の文明の様相を思想や哲学、

本論文は、『文明』投稿規定に基づき、レフェリーの査読を受けたものである。
原稿受理日：2025年12月19日

歴史観，科学観，人間の社会活動といった視点から考察してきた。とくに2024年度からは文明研究を再考する試みとして，文明論—文明に対する概念的，理論的研究—の研究動向を学問知の変遷との関りから検討している。本稿の「文明論の系譜」はその意味である。

文明を捉える視点はさまざまである。とくに19世紀以降，文明論は学問分野の専門化・細分化の問題を吟味し，その弊害を克服すべく学際的，超領域的な学問の方法を模索してきた。他方で，情報化が進む現代のICT時代にあっては，人間の知そのものが高度に複雑化され，人間存在や人間営為の基盤をなす思想や価値意識の検討は困難に直面している。それ故に，これまでの文明を築いてきた知の在り方を再認識すること，そのための文明への視点を明確にすることは，なおも重要な課題であると考えられる。この背景から，本研究では文明論の源流を遡り，今日へ至る文明論の系譜の一端を再検討する。それは同時に，多様な問題が複雑に絡み合う現代文明の諸課題への取り組みに一つの方向性を提示することにつながると考えられる。

本研究にはもう一つ重要な背景がある。東海大学と文明研究の関りであり，それは東海大学創立者松前重義の「文明に対する強い意志」—物質文明と精神文明の調和ある融合を実現させる文明の在り方を問い直す試み—にまで遡る。果たしてその「強い意志」は文明研究所設立にも密接に関わる。それは同時に教育においても全学開講授業「現代文明論」として今日まで受け継がれている。東海大学の文明研究およびそれを基盤とした「現代文明論」について，かつて齋藤博¹はその根底には「骨太の精神（哲学）」があると評した²。そこには，それぞれの文明の表層に見られる様相と同時にその文明を形成してきた人々の内奥に根差す精神性—価値判断や志向性—を検証する姿勢が見出される。一つの文明論—文明を見る総合知としての視座—である。

これらの背景をふまえ，本研究では東海大における文明研究に関わった三名の研究者—下村寅太郎，永井博，齋藤博³—を取り上げ，それぞれが文明研究をどのように捉えてきたかについて検討を進めてきた。ただし，ここでの検討は専ら西欧の思想・哲学，学問論

が中心である。現代文明の礎の一つが西欧文明であることに鑑み，17世紀の西欧近代哲学や近代科学の創始，19世紀を中心とする学問の専門化，細分化を基調としたことに所以する。

本研究では一連の研究を「文明論の系譜」と称するが，本稿ではまず「文明論の系譜(1)」として，研究の前提となる東海大学の文明研究，とくに文明研究所の設置，その目的について紹介する。具体的には，本節に続く第2節「東海大学創立における「文明への意志」」では東海大学と「文明」の関りについて創立者の考え方を中心に紹介する。第3節では「文明研究所の設置と文明研究」として，東海大学において文明研究所が設置された主旨および創設当初の文明研究についてふれる。これに関しては，1980年後半から短い期間だけ発行された『東海大学文明研究所所報』に掲載された二つの論考—「文明研究所創設のころ」(尚樹啓太郎)および「文明研究所歴史断章」(玉井治)—を中心に創設当初を振り返る。なお，これらの論考に関しては付録として再録する。

これらの紹介に続き，第4節「総合知としての文明研究」では，東海大学の文明論がさまざまな専門領域を超えてそれらを総合する形での文明研究を目指してきたことをふまえ，本コア・プロジェクトが進めてきた「超領域人文学」(Trans-disciplinary Humanities)の必要性を含めて文明研究に対する一つの方向性について検討する。

最後に，文明論の系譜という本研究の今日としての意味として，新たな方向性を提起してまとめとする。

2. 東海大学創立における「文明への意志」

東海大学では研究，教育の根幹をなすキー概念として「文明」を掲げている。学園のホームページには創立者松前重義の「建学の精神」(建学の理念)として，「…明日の歴史を担う強い使命感と豊かな人間性をもった人材を育てることにより，「調和のとれた文明社会を建設する」という理想を高く掲げ…」と謳われている。学園内では「物質文明と精神文明の融合」というフレーズもよく耳にする。科学技術に裏打ちされた物質的文明がそれを担う人々の価値意識といった

精神性に支えられてこそ、調和ある社会構築を果たすという思想である。

この思想は大学の研究推進における一つの道標を呈するが、同時に松前は大学教育においても学生に働きかける。全学を対象とする授業「現代文明論」の開講である。この授業の開講は1958年（昭和33年）まで遡るとされる⁴—もともとの原点は望星学塾での松前による講義であったとされる。文明研究所の機関誌『文明』の第8号（1971年（昭和46年））には、「現代文明論の講義から」として松前重義による「現代文明と東海大学の精神」と題された講義録が収められている⁵。この冒頭に「…今日から現代文明論というものを始めるわけではありますが…」と記され、末尾に「昭和四十六年四月二十四日・於湘南校舎」とある。また、『文明』の同じ号には、松前に続いて永井博による「現代の自然観」（昭和四十六年六月二十六日・於札幌校舎）が収録されている。これから、当時は全学に対する「現代文明論」の授業が、松前自身の講義を筆頭に大学の主要な研究者が順に講義を担当して開講されたことがわかる。

上の講義録から、松前自身の「文明」に対する捉え方、学生への働きかけが見て取れる。松前は講義の前半で東海大学建学の歴史を振り返るが、その語りは「文明」への思いで溢れている。冒頭で、

「文明のゆくえ、文明の将来というものを、見通すということが、われわれの今日の生活の基礎を作る…」（松前（1971），p.21）

「現代の文明を理解しようとしたら、われわれは、それを人類の歴史の流れの中に把握することを忘れてはならない…。大きな目で人類の歴史を眺めることによって、はじめて、現代とは何か、文明とは何かということもわかってくる…」（同上，pp.21-22）

と述べ、学生が自らの将来に向けて「文明」を考えることの重要性を説く。そのうえで自らは内村鑑三に刺激され、

「…人生観を確立し、世界観、歴史観を把握し、これらの上に人生いかに生きべきか、社会と国家とはいかにあるべきか、この土台の上に自らの生涯の使命を発見しなければならない。」（同上，p.24）

という思いから教育を使命としたと回想する—大学創設の発露である。

松前はこの講義で「文明」とは何かについて直接はふれていない。人間の過去の歩みを省察する歴史観を基礎に、現在の文明を把握する世界観を涵養し、そこから文明の行く末を見極めることの重要性を説いている。さらに、その姿勢こそが「…文明ということを理解することによって自らの生きるべき道を見出す…」（松前（1971），p.24）と、学生に語りかける。この主張は文明に対する松前自身の強い意志の表明ではなかったか。文明とは、これまで人間がそれぞれの時間、空間において築いてきたもの、その延長線上で現在自分たちを取り囲むものであるが、松前が「文明を思考せよ」と述べる時、「文明」は人間自らの世界観の象徴であり、それ以上に自らの価値判断を伴う指標ではなかったか。この講義録でも述べているように、松前の建学の精神の根幹には学生自らが「思想を培う」こと—将来の文明を切り開く広い視野を育成すること—への強い期待がある。それ故に、松前の「文明への意志」は未来を志向するものである。松前の現代文明論講義はまさに彼自身の期待を学生に働きかけるものであったのである。

この学生への期待は、実際には東海大学の教育を担う教職員に対しても同様であった。松前自身、当時は人々の「文明」に対する意識が低かったと回想しているが、新制大学への移行期に文明研究を基盤とする文学部設置を希求していた経緯がある。そこには「文明」を学際的に研究し、確固たる文明論として大学に敷衍させる彼自身の意図が見られる。しかし、実際にはそうした学部設置の希望は認められなかった。詳細は次節に譲るが、その経緯のなかで文明研究を推進する機関として設立されたのが文明研究所であった。

3. 文明研究所の設置と文明研究

東海大学文明研究所の創設は1959年(昭和34年)とされる⁶。1958年からの文学部開設⁷—清水校舎から代々木校舎に移転しての再開—に一年遅れてのことであった。文学部開設に際しての当初の方向性には大学創立者松前重義の世界観、学問観が込められていた。松前重義は幅広い視野から「文学」研究を人間営為の歴史と人間の在り方の探求と捉え、これを修める学問に「文明」の名を冠することを構想したのである。しかし、こうした趣旨の「文明学部」あるいは「文明学科」の設置は当時は公的には認められず、その強い想いが文明研究所設置の形で実現されることとなる。

『東海大学五十年史』には、文明研究所の設置の趣旨、目的として「人間の文明の全領域にわたる立体像を描き出すこと」と記されている⁸。ここには松前の文明観—上で述べた文明の捉え方—が反映されている。こうして設立された文明研究所であるが、その経緯に関しては興味深い文書が残されている。それは以下に挙げる二つの記事で、文明研究所が1987年から1991年までに発行した『所報』に収録されている⁹。

(1) 尚樹啓太郎、「文明研究所創設のころ」

(2) 玉井治、「文明研究所歴史断章」

前者は文明研究所の創設あるいは創設後の展開に直接関与した尚樹が自らの経験をもとに、また、後者は玉井が残された資料を検証しながら綴った貴重な史料である。本稿では、これらを稿末に【付録】の形で再録する。これら二つの史料からは、東海大学における文明研究の拠点としての文明研究所の意義が垣間見られる。

1987年当時、文明研究所の事務室には8冊の大学ノートが残されていた。玉井はこれらのノートと研究所の機関誌『文明』創刊号に記された「文明研究所日誌」をもとに、「文明研究所歴史断章」(以下「歴史断章」)として創設当初の研究所の状況を振り返る。そこには文明研究に向けた当初の取り組み、やがて研究所が「現代文明論」を核とする一般教育の中心を担う経緯が、具体的な内容とともに記述されている。

他方、尚樹の「文明研究所創設のころ」(以下「創

設のころ」)では、1959年の代々木校舎での文学部開設—正確には文学部の改組と移転—の詳細を振り返る。創立者である松前は「文学」を「文系の学際的総合学」と捉え、その根幹に文明研究を据えていたことがうかがえる。確かに文学部再出発に際して新しい特色を打ち出すという大学運営上の政策的な目論見もあろうが、そこには松前の明確な学問観がうかがえる。「文明」をキー概念とした新たな—当時としては斬新な—学問研究の道を開くという構想である。尚樹は「創設のころ」で、研究所が1962年から発刊している『文明』第1号の当時の所長原田敏明による「創刊のことば」を引用する。多少長くなるが、その一部を再掲する。

「…既成の学問に拘束されない、新しい学問の誕生をも促している。…当研究所は、人類文明の全領域を体系的に把握しうる学問の成立の可能性、あるいは、そのような学問研究の体制の成立の可能性を探求することを目的として設置された。」

「…文明を学問的研究の対象として、新しい学問的総合を旨とするというのは、歴史学に限らず、今日の人文、社会諸科学のあらゆる方向から試みられるべき事柄であって、あるいはさらに、自然科学の領域と、自然科学の発展を史的、理論的に考究する学問の領域からも、試みがなされるべきであろう。そのような見地から、当研究所の研究内容も、限定されない広さをもって進められており、諸学の交流と、その交流をさらに一歩前進させた新しい学問体系あるいは研究体制というものの創出が真剣に考えられねばならない。」¹⁰

これは1962年の文明研究所の機関誌『文明』の創刊に当たったもので、ここには文明研究の在り方—それは同時に文明研究所の使命—が綴られている。「創刊のことば」にしても、尚樹の「創設のころ」にしても、「文明」を必ずしも明確には定義していない。むしろ文明研究の目的とその方法を説くことでそれらを文明研究所のレゾン・デートルとして位置づけている。それは、戦後の混沌とした世界の現在と未来を見通すう

えて、人間営為に関わるあらゆる領域にも通底する総合的な学問創出の可能性を追求することと理解される。すなわち、文明研究所はそうした学究の組織として設置されたことになるが、果たして「東海大学文明研究所規則」にはその趣旨、目的が明確に規定されている。

「第2条 研究所は、人類文明という包括的事実を、人文・社会・自然科学の協力によって探求し、文明学という新しい学問的理想を完成、発展させることを目的とする。」¹¹

以上から、東海大学文明研究所が、創立者松前重義の文系の総合的学問の探求の場としての文学部構想に端を発し、それを実現せしめる機関として設置されたことがわかる。それ以上に、上の「規則」には興味深い一言が見出される—「文明学」あるいは「文明学という新しい学問的理想」である。文明に関する研究はさまざまな領域を跨いでこそ可能になる。それだけに「文明学」が一つの学の体系として構築され得るかは現在でも議論がある。むしろ、たとえば今日環境学が環境に関わるさまざまな分野の総合研究を総称するように、「文明学」も同様の様相を呈すると考えられる。それでも、文明研究を一つの学の体系として構築しようという意識が研究所設置当初には既に明確に見出される。そして、この意識は、その後の研究所の活動にも受け継がれていくことになる。

玉井の「歴史断章」では、研究所設置当初から研究所内で文明を主題とする研究会を開催していたことが示唆されている。これと尚樹の「創設のころ」の記述を合わせると、設置から5年後の1963年には「現代科学研究会」、「ヨーロッパ研究会」のグループが存在し、活発な研究活動が進められていたことがうかがえる。多少断片的ではあるが、本研究との関連でいえば、下村寅太郎もこうした研究会に参加し、1963年発行の『文明』第2号に論文を寄稿している。これらの研究会は後に発展的に再編成されて継続されたようで、その一つである「文明理論研究会」でも、1976年に下村が「ブルクハルトの文化史について」を研究報告

している（『文明』第19号に論文掲載）。また、1980年代後半には齋藤博が研究会の代表を務めている。

「文明学」という新たな学問構想—文明を人文・社会科学および自然科学を総合した点から検討する学際的体系の構築—は、文明研究所設置の根幹に据えられた理念であった。設置当初から研究所内で開催された種々の研究会もこの理念をふまえてのものであったと推察される。同時に、当時のさまざまな史料からは、研究方法、研究の方向性に対する難しさ—それ故の新たな可能性への期待—があったことも推察される。上で引用した原田の「創刊のことば」には次のような文言が見られる。

「文明が歴史研究における一単位として考究されるのではないかということは、戦後いち早く、英国の歴史家アーノルド・J・トインビーによって提示されたところであって、現代に学問する者の無視できない課題の一つである。」

「…文明の地域的研究、あるいは地域の総合的研究の試みがつみ重ねられなければならない。そのような着実な成果にもとづいて、はじめて、比較文明的研究、世界史的研究、現代文明の学問的考察、現実の国際関係への学問的発言も可能となり、…高度な意味での学問の実用化をも実現しうるであろう。…」

ここでは「比較文明的研究」、「世界史的研究」、「現代文明の学問的考察」、「現実の国際関係への学問的発言」と並び、比較文明論も含めて幅広い研究の方向性が示されている。とくに、人類の文明の歴史を顧みながらその時代の国際社会をも見通すという視点は、当時としては斬新なものであったと思われる。他方で、「文明が歴史研究における一単位として考究される」ことの妥当性をトインビーの名を挙げて述べている。尚樹の「創設のころ」には、この「創刊のことば」の文案作成に尚樹自らが関わったことが記されているから、この背景には歴史学者である尚樹による歴史哲学（いわゆる思弁的歴史哲学）への意向が見られる。同時に、上での「文明の地域研究あるいは地域の総合的

研究」には、民族学や宗教史学を専門とする原田の社会学的研究への意志も反映されていると思われる。こうした傾向は他にも見られる。第三代所長を務めた足利惇氏はインド・ペルシア研究を専門とする歴史学者であるが、齋藤博が記すところでは、文明研究について齋藤が歴史哲学ないし文明理論を強調したのに対し、足利は地域研究ないしフィールド研究を柱にするべきであると考えていたことが示唆されている¹²。

むしろ、こうした多様な学問の総合こそが文明研究所に求められ、それが設置当初の研究所で実践されていたことがうかがえる。

4. 総合知としての文明研究

前節で見たように、東海大学文明研究所はまさに文明研究の拠点、文明を探求する総合的学問—理想としての「文明学」—の構築を担う機関として設置され、そこでは多種多様な研究がさまざまな分野から領域を超えて批評、検討された。文明研究に向けた学問の総合—いわば総合知—の必要性が求められる背景の一つには、近代以降の学問の体系の問題がある—17世紀の近代精神のもとで展開してきたヨーロッパ中心の学問知の構想、さらに19世紀以降に専門化した学問の台頭である。それは極論すれば、学問そのものが、学問知におけるある種の機械論主義の下での専門化、discipline¹³が専ら discipline のための対象に対する研究を深化させ、discipline を強化するという傾向を推し進めた。たとえば自然を対象とする自然科学は自然の解明を進め、やがて科学技術として絶大な力を発揮して人間生活の comfort（快適さに対する満足）を向上させ、その成果を誇ってきた。それは人間自らが希求し、受容してきた結果である。しかし、その反面、その発展が今日のさまざまな問題—高度な戦争兵器の開発、地球規模での環境問題、技術文明による人間性の阻害など—を生じさせていることも事実である。文明研究はまさにこうした社会の変化に対し、上の例というなら科学技術の価値を検証し直すことで、社会が目指すべき新たな姿を描く努力である。それ故にその必要性が求められるのである。松前の「文明への強い意志」も、また、それを受けた文明研究所設置の趣旨

も、その脈絡のなかに捉えられる。本稿が文明論の系譜を辿り、文明の在り方を見通す人間の知的活動をより一層理解しようというのも、その延長線上に位置づけられる。

それでは、現代において文明研究はいかになされるべきか。むしろ文明研究に向けた学問の総合はいかになされるべきか。この問いに対しては20世紀後半から今世紀にかけてさまざまな検討が続けられてきた—文明論の議論である。筆者のグループでもこの問題に関して検討を重ねてきた¹⁴。実際、学問の総合、学際的研究といってもその形態や方法はさまざまである。人間営為の総体である文明の研究にとっては、人間の歴史や文化、精神性、人間と社会の動向、人間を取り巻く科学技術社会など、その対象は限りない。したがって、一つの discipline から文明の一断面を捉えることもできれば、複数の discipline の総合という視点から複合的に捉えることもできる。それ故に、文明を捉える視座が重要になる。

学問を総合する—discipline を複合させる—という研究手法はすでに1930年頃にL. フェーブルとM. ブロックによるアナール学派に見られる。歴史研究に民衆文化や生活誌、社会史的諸要素を複合した新たな歴史研究の導入である。科学史・数学史においては、1980年頃にアメリカの数学史家J. グラビナーが数学史における全体史（total history）用いた研究手法を提唱する。数学理論の形成、展開史にあっても、数学以外の要因の影響をふまえる必要を説いたのである¹⁵。他方、「学際的研究」という点では、シェリフ & シェリフによる比較的早い時期の研究『学際研究 = 社会科学のフロンティア =』がある。この書では社会科学における学問の複合、総合としての interdisciplinary な手法の必要性が示されるが、その冒頭で、

「いかなる科学的専門領域も自分の専門領域だけで孤立しては、社会科学の発展はあり得ず、一般化の妥当性の検証に答えることはできない。そこで、複数以上個別科学にまたがって、すなわち、異専門領域にわたって分析しようとするイン

ターディスプリナリーな態度、さらに、複数以上の個別科学に妥当するようなクロスディプリナリーな態度が必要とされるに至った。」¹⁶ (シェリフ&シェリフ (1971), p.3)

との示唆がなされる。これはフィールド調査を含めた社会科学研究に向けての議論ではあるが、その姿勢は今日の文明研究にも通じると考えられる。

こうした問題に対し、筆者のグループでは文明を論じるうえでの学問の総合を trans-disciplinary な方向で検討し、現在では「超領域人文学」(Trans-disciplinary Humanities) として研究を進めている。この発想は、一つにはルネサンスにおける科学や芸術などを含めた知の在り方の検討を端緒とする。ルネサンスの学問知が discipline ごとの知の集合体ではなく、古代ギリシアなどの古典知識を根底に置きながらも人々の経験知をも内包したある種の総合知から構成されるのではないかという問題点である。さらに、文明を人間営為の総体とするなら、その根底にはその人間営為を支える精神—価値意識—が存在する。伊東俊太郎が提唱する文化・文明モデル¹⁷を用いるなら、人々の生活空間としての文明はそれぞれの多様な知によって構成され、その知は人間の内奥に根差す精神性によって支えられることになる。したがって、文明を理解する方法の一つとして、諸々の学問の領域を超えた複合的視点から人間営為と、同時にその根底にある精神性を検討することが求められる—すなわち「超領域人文学」の構想である。

trans-disciplinary な手法に関しては、神川正彦の研究がよく知られる。比較文明学の研究で知られる神川は文明研究所との関わりも見られる¹⁸。神川は、17世紀のデカルトに端を発する近代科学の手法が自律的 discipline の確立を目指し、それ故に排他的である(「切断の方法論」)のに対し、文明を比較する—したがって文明を理解する—際に諸領域を横断する手法としての「接合の方法論」の必要性を説いた¹⁹。すなわち trans-disciplinary な手法である。神川の議論は文明研究にとって一つの重要な方向性を示唆するものであるが、本稿ではそのエッセンスについて神川の 1990 年

代の研究を中心に検討する²⁰。

神川は、今日の文明が 19 世紀の学問的パラダイムを基軸とし、個々の discipline —すなわち専門的な個別学問領域—の自律性という原理によって作り出されたという歴史経緯に立脚し、「ディシプリンの自律的確立とはどこまでも他のディシプリンから明確に区別されることをもとめる排他的な営為」(神川(1990), p.18-19) であり、それ故にその方法は「切断的」なものであると指摘する。そのうえで、今日の人間が 18 世紀に夢見られた学問の“原像”としての「百科全書(encyclopedia)的な知」に立ち戻ることを推奨し、すなわち個別な discipline を循環し合うように関連させるという trans-disciplinary (超領域的, 超学域的) な学問の必要性を提起する。

神川の trans-disciplinary な手法の導入の根底には比較文明学の構築を見据えた意識があることは確かである。実際、1990 年の論文において神川は、比較文明学にとって、従来の学問観にとらわれずに discipline の在り方そのものの検討から新たな学問観をもたらす方法の必要性を自覚することこそが重要であると指摘する。神川の主張は、世界文明と地域文化を総合的に捉えるうえで、文化と文明の概念構成を含めた理論的枠組みの再構成の必要性を説き、そのための従来の discipline を複合する trans-disciplinary な学の体系を導入するという点に集約される。そのうえで、従来の discipline からの展開として、inter-discipline および trans-discipline を位置づける。

1. <ディシプリン> …17 世紀科学革命以後の近代科学はそれぞれのディシプリンの自律的確立を求める軌跡といえる。ディシプリンはもともと規律, 訓練, 戒律といった意味であり, 専門家となるには厳しい訓練と規律が求められる。学問の自律化は本質的に権威性や排他性と結びついている。
2. <インター・ディシプリン> (学際的) …一例として 20 世紀半ば頃から現れてきた「地域研究」(area studies)が挙げられる。「地域研究」はそれ自体として学問的権威を志向する向き

もあるが、むしろ特定のディシプリン（政治学など）だけでは難しい、ある地域の在り方に全面的に関わり得る可能性を求めるところに、その学際的研究としての必然性と自律性の根拠を見出すことができる。

3. <トランス・ディシプリン> …「地域研究」が地域文化の解明だけに留まり得るとすれば、その延長上に世界文明の解明まで見据える比較文明学の在り方は「トランス・ディシプリン」と名付け得る。」²¹（神川（1990））

すでに述べたとおり、ここでは個々の discipline が自律性と排他性によって discipline どうしを分離切断してしまうのに対し、inter-discipline では個々の discipline を保持しながらもその相互関係を重視するという視点を含むことを意味する。さらに、trans-discipline では、「一つの discipline からの越境的な試み」ばかりではなく、対象となる問題に対する「discipline の枠組みを越えた積極的アプローチ」として位置づけられる。このように考えると、神川の trans-discipline は文明研究にとって一つの有効な方法を提起する。それは、文明研究が「常識、習俗…科学、技術、思想、宗教、芸術、教育などあらゆる知的要因を人間・装置＝制度系のうちに組み込んで成立するきわめて包括的なシステムの問題」を扱うからである。

文明研究所が設置された 1960 年頃は、度重なる戦争の 20 世紀を経て、東西冷戦、植民地問題、民族紛争など世界中でさまざまな問題が生じていた。こうしたなか、一方で大国を中心とするグローバル化が進展するなかで、他方では多様な文化、文明を捉え直す視点の萌芽も見られる。たとえば、文明をめぐる学界では、比較文明学会が 1983 年に設立される（母体である「文明論研究会」は 1978 年に結成される）。1985 年に発刊された比較文明学会誌『比較文明』の創刊号で、当学会の初代会長の伊東俊太郎は次のように述べる。

「今や西欧中心の色眼がねで、諸文明を切って見

る時代は終わった。我々は我々自身の文明の座標をもたねばならない。…（それが）いわば人類の代表として世界文明の公平な行司役となり、来るべき地球社会の共通財産となるようなものであることを期したい。」²²

文明研究所における学問の総合を視座に据えた文明研究は、伊東のいう「我々自身の文明の座標」を手に通じる。研究所の文明学の構想は、まさにその道標であったということができる。そして、文明がさまざまな要素が織りなす構造体であることを考えるとき、我々は従来からの研究手法を再検討し、人間営為という有機的に複合された対象を扱う手法を手になければならなくなる—すなわち総合知の手法であり、その一つが「超領域人文学」の構想である。

5. まとめにかえて

本研究は、「文明とは何か」、「文明をいかに捉えるか」という問題に対し、これまでの文明探求の試み—それ故に文明論の系譜—を再検討することを目的とする。それは文明研究を支える思想・哲学とはいかなるものかという問いを内包し、それ故に学問知の変遷を辿ることも重要となる。本研究では、東海大学における文明研究を背景として検討を続けてきたが、とくに本稿では「文明論の系譜 (1)」として、その基点である東海大学の文明研究—とくに東海大学文明研究所の設置—について紹介した。

文明が人間営為の総体である以上、それが 19 世紀以来の学問知だけでは捉えきれないことはいうまでもない—学問の総合、知の総合が求められる。果たして、東海大学の創立者が「物質文明と精神文明の融合」を提唱して文明研究を推進せんとしたことも、文明研究所が学の総合による「文明学という新しい学問的理想」を掲げたことも、文明への視座—その研究の視点—としての総合知の必要性への意識が故であった。本研究が「超領域人文学 (Trans-disciplinary Humanities)」の構築を目指すこともこの延長線上に位置づけられる。

齋藤博は 1990 年前後に発刊された『文明研究所所報』の創刊号で、前研究所長として「文明研究所の理

念」²³ という一文を寄せている。一部を抜粋する。

「大学における研究所は、学部学科の保守的な機能を補充して学問の進展に従い、あるいは学問領域の新たな展開を促し先取りする役割を担っている・・・この点では研究所は・・・自由な活動を基本に据えなければならない。更に学問共同体としての大学が社会と不可分の関わりを持つことから、・・・研究所の機能は大学に対する社会の要求を取捨選択し受容するための、いわば社会にたいして開かれた窓口となることであろう。」

さらに

「研究所の研究活動は、学問研究そのものに対する問いかけを踏まえて、既成の学問を俎上に載せてその在り方を問い、・・・あえていうならば、既成の学問の方法的枠組みに囚われることなく、学問そのものの構築を目指す自由が容認され、また求められもするのである。」

と続ける。これは、研究所が学問のための自由で開かれた機関であり、そこでは新たな学問が探求されなければならないし、同時に、その責を担っていることを自覚しなければならない、という提言である。

齋藤が「文明研究所の理念」として上のとおり述べた根底には、おそらくは「文明学の構築」という強い思いがあったことが推察される。実際、齋藤の研究には文明を思考する一つの確固たる思想が見出されるが、本稿の冒頭で紹介した「骨太の精神（哲学）」という言葉にもその意志が表れている。

文明研究に関しては、齋藤は知の組み換えの必要性を問いかける。

「・・・自然科学的な知のパラダイムは歴史的・社会的・文化的な人間活動の全体を理解し、その秩序付けないし意味付けをするには不十分なものであることが明白になっている・・・現代文明論がいわゆる文系・理系の総合を目指す知的パラダイ

ムの形成を企図していることはあらためて指摘するまでもない・・・」

ここには、文明研究所の設置主旨をふまえ、文明を捉えるあらたな学問知の構築を希求する思いが込められている。とくに上の引用の最後にふれているように、現代文明論への大きな期待が滲み出ていると感じられる。

本稿の最後に、「文明論の系譜」の研究をとおして筆者のグループが目指している文明研究の方向性、そこから期待される成果について、問題提起という意味も含めて以下にまとめておく。

- (1) 文明論は近代以降の学問分野の専門化・細分化の問題点を吟味し、その弊害を克服すべく学際的・超領域的な学問の方法を模索してきた。こうした inter- ないし trans-disciplinary な学問的営為は、人間営為を総合的に捉え、各人間営為の相互の関連性やそこから生じる多様な事象を研究する—「総合知」を志向する—ことにつながる。そのために、文明研究の源流をさかのぼり、今日へ至る系譜を再検討することは、多様な問題が複雑に関連し合う現代文明の諸課題に取り組む意味で重要な意義をもつと考えられる。
- (2) 現代文明の一つの基盤が西欧文明であると考えるとき、西欧の思想・哲学や歴史をふまえた研究の流れを理解することは、今日の文明の在り方を考えるうえで重要な要素となる。とくに西欧を起源とする人為的人工的産物だけでなく、経済、政治、法、社会的諸制度および学問、芸術、およびこれらの背後にある西欧的精神ないし価値意識を知ることは、今日の「文明」に対する一つの理解を促す。
- (3) とくに西欧における教養を考えると、たとえば Bildung は人間の理想的な自己の形成—未形成なる自己の自覚を内包し、そこから個性的自己を形成すること—を意味する。こうした西欧の哲学精神の中核を考えると、文明論の検討は既成の分化した知的形態（すなわち discipline）の伝統を精査し乗り越えるうえでの一つの方向性

を示唆し、世界理解の教養として位置づけられる。

- (4) 現代という混迷の時代にあっては、現代的な社会課題や国際問題を検討する学問的な礎を構築することが必要になる。世界が多様性に満ちていることをふまえれば、その手法として学際的思考が求められると同時に、未来志向型の学問的営為を目指すものである。文明論はその一つの核になると考えられる。

参考文献

- 東海大学理事長室編,「東海大学建学の思想とその源泉」(東海大学総長松前達郎), 2019年6月改訂版。
- 東海大学文明研究所,「東海大学文明研究所規則」,『文明』,東海大学文明研究所,第1号,1962年,pp.122-123.
- 足利惇氏(1988),『足利惇氏著作集 第三巻——随想・思い出の記』,(尚樹啓太郎,渡瀬信之編),東海大学出版会。
- 伊東俊太郎(1985),「比較文明論の枠組み」,『比較文明』,比較文明学会,第1号,pp.2-17.
- 神川正彦(1988),「比較文明とは何か—方法を通して」,『文明』,東海大学文明研究所,第54号,pp.23-48.
- 神川正彦(1990),「方法の必要性—問題設定と解明のために」,『比較文明』,比較文明学会,第6号,pp.11-24.
- 神川正彦(1996),「文明の転換と価値の転換—価値哲学の立場から」(『比較文明』,比較文明学会,第12号,pp.6-18.
- 神川正彦(1999),「比較文明学の学的基本性格」,『比較文明学の理論と方法』,朝倉書店,pp.176-191(第11章).
- 齋藤博(1987),「文明研究所の理念」,『東海大学文明研究所所報』,東海大学文明研究所, No.1.
- M. シェリフ, C.W. シェリフ(1971), 岡博監訳,『学際研究—社会科学のフロンティア—』,鹿島研究所出版会。
- 尚樹啓太郎(1988),「文明研究所創設のころ」,『東海大学文明研究所所報』,東海大学文明研究所, No.3(1988), No.4(1989), No.6(1991)に全体を再掲載。
- 玉井治(1988),「文明研究所歴史断章」,『東海大学文明研究所所報』,東海大学文明研究所, No.3(1988), No.6(1991)に再掲載。
- 原田敏明(1962),「創刊のことば」,『文明』,東海大学文明研究所,第1号,pp.1-2.
- 松前重義(1971),「現代文明と東海大学の精神」,『文明』,東海大学文明研究所,第8号,pp.21-35.
- 平野葉一(2005),「Trans-Discipline から見た科学・数学」,『文明』,東海大学文明研究所,第7号,pp.52-59.
- 平野葉一,中村朋子(2014),「学問史から見た数学の展開」,『文明研究』,東海大学文明学会,第33号,pp.41-54.
- Sei Watanabe, Yoichi Hirano(2024),“Synthetic knowledge in civilization studies,” *Civilizations*, Institute of Civilization Research, Tokai University, No.35, pp. 57-64.
- 平野葉一(2024),「巻頭言—文明研究と総合知」,『文明』,東海大学文明研究所, No.34, pp. iii-iv.

【付録 I】

文明研究所創設のころ

尚樹啓太郎

松前重義先生の東海大学建学の事業は、先生が内村鑑三の聖書研究会に参加し、その影響を受けて自宅で教育研究会を始めた時点にまでさかのぼることかできる。それがのちの東海科学専門学校になったことは、我々のよく知っているところである。しかし東海大学の直接の母体は、昭和 21 年に清水市駒越に設立された旧制東海大学予科であった。予科は文科と理科に分かれていたが、3 年たつと学部に進学する者が出てくるのであるから、東海大学も昭和 24 年には文学部と工学部かできることになっていた。しかし学園の経営は早々と危機に陥り、東海科学専門学校という母体のあった工学部はなんとか成立したものの、予定されていた文学部は、経済系の学科を加えることによって少しでも学生を集めようという期待で、経文学部という形になった。ちょうどこの頃は旧制と新制の切り換えのときで、私立大学は国立大学より 1 年早く新制に切り換えられたから、東海大学もこの時点で新制大学になった。しかし困難な社会情勢の中で学園の経営はますます困難になり、ついに経文学部は休止のやむなきにいたり、ついで工学部は昭和 30 年に東京移転を断行して、苦境の打開がはかられた。

私のところに、牧野不二夫先生から突然電話があり、文学部を作るのでその準備の仕事を手伝うようにという話があったのは、昭和 32 年の 4 月あるいは 5 月頃のことではなかったかと思う。東京における文学部再開計画について、松前重義先生に協力されたのが、足利淳氏先生と鈴木成高先生で、私を再開される文学部のスタッフとして推薦して下さったのは鈴木成高先生であった。当時の東海大学の校舎は、代々木校舎の 1 号館と建設中の 2 号館があるだけで、文系の専任教員はほとんどおらず、私に声がかかったように、何人かの若い教員が準備された。しかしとても文学部に何かまとまった一つの学科を作るような専任のスタッフは揃っていなかった。宮本延人(人類学)、富田英一(英

文学)、高岡和夫(ドイツ文学)、村瀬敏雄(日本文学)、青柳晃一(比較文学)、春原幸雄(教育学)、尚樹啓太郎(西洋史学)といったぐあいであった。

文学部再開準備の頃、私の机は 1 号館 2 階の総長室の隣にあった。隣といっても、その部屋には牧野先生と工学部の黒田義輝、佐藤達男両先生の机もあり、誰か客がくるとその部屋で対応し、松前先生は毎日我々のいる部屋を歩いて総長室に入られたのである。したがって文学部再開の構想についても、たえず松前先生に接し、その指示をうけた。その過程で生まれたのが文明学科の構想である。新しく再開されるべき文学部は、どこにでもありふれたものを真似しても意味がない。東海大学独自の斬新なものにするべきであるというのが、松前先生の主張であった。これは本来なら文明学部を目指してもよかったのであろう。しかし僅かな人員しかいなかった当時の状況ではそれは無理で、学科のレベルで文部省に申請することになった。今日でこそ文部省は前例のない学科でもかなり前向きに認可するようになったが、当時とはとてもそんな雰囲気ではなかった。また今日でこそ「文明」という言葉がふたたび広く一般に使われるようになっているが、明治以来さかんに使われたこの言葉は、当時はほとんど死語に等しく、蔵の中で黴の生えた古臭い言葉になっていた。そんな言葉を付した学科など何をやるどころなのか、大学の学科としてはなじまないというのが、文部省当局に受け入れられなかった理由であらう。

結局、昭和 33 年 4 月、代々木校舎に文学部文学科が開設されるという形で、文学部の再開となった。文部省事務当局はこれを学部の新設として扱おうとしたが、大学はあくまでもかつて清水にあった文学部を東京に再開したという立場をとった。正確に言えば清水にあったのは経文学部であるが、その経済の部分を除いて純粋に文学部部門だけで再開したのである。この文学部の文学科というのがまた問題であった。文学部の「文学」とは、英文学とか日本文学とか言う場合の「文学」ではなく、文学部と言う場合の「文学」であると我々は説明したからである。すなわち文系の学際的総合学であると主張したのである。文明という名称は使わなかったが、実質は文明学科の主張と同じであ

る。今日でこそ学際的な学問研究ということの人々は理解してくれるようになったが、当時は今日のようにはなかった。この説明も文部省事務当局の受け入れるところではなかった。結局、清水にあったものの再開を認めるが、しかし早急に文学部としての体裁を整えるということに決着し、昭和34年4月に文学部は史学科と英文学科という2学科に編成された。これが文学部の始まりである。

文明研究所の創設は、こうした文学部の出発と密接に関連している。昭和37年2月15日発行の『文明』第1号の巻頭にある「創刊のことば」は、私の草稿にもとづく当時の所長原田敏明先生の文章であるが、文明研究所創設の事情と文明研究所がめざしたものとをよく示していると思うので、ここに記しておこう。

「……………そもそも当研究所は、東京における本学文学部の再出発に際し、新興の大学としての特色ある文学部を作ろうという構想の中から生まれた。当初既成の大学の学科編成にとらわれることなく、新しい学問的理想をもった文明学科として準備されたのであったが、学内外の事情はこれを時期尚早であるとし、文明研究所として発足させたのである。

20世紀における人類文明の新発展と、国際関係の史上に類を見ない拡大と緊密化とは、学問の世界にも諸種の影響を与えている。特に今次大戦以後におけるその事情は、学問の性格、内容、分類等に少なからぬ影響を及ぼし、既成の学問に拘束されない、新しい学問の誕生をも促している。

このような情勢の下で、当研究所は、人類文明の全領域を体系的に把握しうる学問の成立の可能性、あるいは、そのような学問研究の体制の成立の可能性を探索することを目的として設置された。

文明が歴史研究における一単位として考究されるのではないかということは、戦後いち早く、英国の歴史家アーノルド・J・トインビーによって提示されたところであって、現代に学問する者の無視できない課題の一つである。そして事実また、文明の比較的研究が、今日漸く注目され、すでに欧米ではいくつかの研究機関が成立しつつあることも、我々のしばしば耳にするところである。

もちろん、文明を学問的研究の対象として、新しい学問的综合を目ざそうというのは、歴史学に限らず、今日の人文、社会諸科学のあらゆる方向から試みられるべき事柄であって、あるいはさらに、自然科学の領域と、自然科学の発展を史的、理論的に考究する学問の領域からも、試みがなされるべきであろう。そのような見地から、当研究所の研究内容も、限定されない広さをもって進められており、諸学の交流と、その交流をさらに一歩前進させた新しい学問体系あるいは研究体制というものの創出が真剣に考えられねばならない。

…文明の地域的研究、あるいは地域の総合的研究の試みがつみ重ねられなければならない。そのような着実な成果にもとづいて、はじめて、比較文明的研究、世界史的研究、現代文明の学問的考察、現実の国際関係への学問的発言も可能となり、学問の非現実化、趣味化、死文化を脱し、高度な意味での学問の実用化をも実現しうるであろう。……………」

このように文明研究所の創設は文学部でめざした文明学科にかわって、新しい学問としての文明の研究を目的としたものであった。したがって、昭和33年の文学部再開と同時に始められるべきものであったが、先に述べたように、この年はとりあえず文学科で始まった文学部を史学科と英文学科に編成しなোসという仕事を抱えており、研究所の体制を調える仕事は文学部の開始よりも遅れた。『文明』1号巻末にある東海大学文明研究所規則の末尾に「本規則は昭和34年4月1日から実施する」と記されているのはそのことを示しており、このときが事実上の文明研究所の発足であった。上記の規則の第2条は、創刊のことばよりもっと簡潔に、文明研究所の研究目的を示そうとして、当時の文学部スタッフが文案をおおいに論じながら、定めたものである。すなわち、「研究所は、人類文明という包括的事実を、人文・社会・自然科学の協力によって探究し、文明学という新しい学問的理想を完成、発展させることを目的とする。」と述べており、施設は貧しく、財政は苦しくても、当時のスタッフの若い意気込みが、私にはひしひしと感じとれる。「ここに記された夢は大きく、果てしない。しかし現実の学問

的作業の困難は一層大きい。今後とも所員一同、互いに研鑽し、若い学問的情熱が、やがて我々の夢を大成させる日の来ることを期待して、」(上記創刊のことば)という気負いは、まさに当時のスタッフ全員のものであった。

研究所のスタッフといっても、文学部の専任以外にいたわけではない。『文明』第1号に掲載されている日誌によると、所長のほかに、高岡、尚樹の2名が幹事、辻哲夫、杉浦忠夫、青柳晃一の3名が所員、小林基、大津栄一郎、尾佐竹博の3名が研究員、里見元一郎、小野二郎の2名が研究嘱託となっている。こうして整えられた研究所はさっそく『文明』の発刊を決議している。しかし当時はこんな小雑誌の発刊でも容易ではなく、実際に発刊されたのは、すでに述べたように昭和37年2月であった。表紙の『文明』の文字は、原田先生が聖徳太子の『法華経義疎』から拾字して作ったものである。

このときから研究会、共通のテキストを選んで読む輪読会、各自が狭い専門の殻を破って、共通の問題意識で話し合うシンポジウムなどを積極的に行った。

『文明』第1号には「現代について」というシンポジウムの報告が掲載されている。それは1959(昭和34)年12月15日から翌年3月10日の間に辻哲夫、青柳晃一、高岡和夫、尚樹啓太郎の4人が担当して行ったシンポジウムをまとめたものである。この報告の冒頭に書かれている文章は、たしか辻氏の筆になるものではないかと思うのだが、「はじめに」と題されていて、今あらためてこの文章を読むと面映ゆい気さえする。しかしここには文明研究所創設の頃の意気込みが明白に息づいている。現代に対する問題意識は強烈であった。当初のこの強い意欲を思うと、その後の研究所の歩みは、いささか停滞と迷いにすぎたのではないかとさえ反省させられるのである。現代についての問題意識は『文明』第2号にも、座談会「現代について」を実現させている。これには故鈴木成高先生を中心に、谷嶋喬四郎、辻、青柳、尚樹が加わっている。この傾向は『文明』第5号にも青柳、高岡、谷口、辻、広重徹が参加の座談会「第二次世界大戦と現代の意識」を実現させている。このように文明研究所の研究には、

本来きわめて強い現代に対する問題意識があったのであり、この方向は決して間違っていないと思う。我々はもう一度この方向を明確に意識して我々の研究の中にとりもどすべきであろう。

1963(昭和38)年から『文明』は年2回の刊行になり、第2号と第3号が発行されたのであるが、後者は「文明と科学技術」という特集を組み、恒藤敏彦、佐藤七郎、谷口亘、広重徹、辻哲夫の諸氏が執筆している。我々は当初から研究所にとって、科学論、技術論あるいは科学史は重要な主題であると考えていたし、その中心になっていたのは辻氏であった。そしてまた1964(昭和39)年の『文明』第4号には、松前総長が「平和共存の歴史的意義」という文章を寄せている。言うまでもなくこの文章は、「平和」を現代の重要な問題としてとらえた総長の、今日にいたる一貫した態度を早くから示した文章であり、同時に総長みずから寄稿するという当時の雰囲気がありありと浮かんでくる思い出の文章でもある。

1963年は文明研究所にとってひとつの発展を画した時期でもあった。研究所に里見、齊藤、尚樹の「ヨーロッパ研究」グループと辻、谷口、木村の「現代科学研究」グループができ、東海大学出版会から文明研究所シリーズを刊行することが計画されたのである。これは翌年兼岩正夫著「西洋中世の歴史家」をかわきりに上記両グループの編集参加によって、デュプレ、レイコフ著、中山茂訳「科学と国家」、下村寅太郎著「西田幾多郎、人と思想」、ホイジンガ著、里見元一郎訳「文化史の課題」、広重、辻、木村、谷口、西尾共著「現代物理学の形成」、コンフォード著、広川洋一訳「宗教から科学へ」などとなってつきつぎと刊行され、異色のシリーズとして世間の注目を引いたのである。

大学は1963(昭和38)年に湘南校舎での授業を開始した。これからの数年は、この頃の大学の変化する状況を反映して、文明研究所にもいろいろな変化が起こった年であった。1966(昭和41)年から1970(昭和45)年にかけて、雑誌『文明』の発行が中断した。研究所の創立当初は所長は松前重義総長であったが、1960(昭和35)年に原田敏明教授が文学部長に就任すると、研究所長を兼務した。ついで1965(昭和

40)年には文学部長兼文明研究所長は足利惇氏教授に引き継がれた。文学部には1965(昭和40)年に文明学科アジア専攻が、1966(昭和41)年に同ヨーロッパ専攻が作られた。これは必ずしも文学部東京再開のときの学問的理想の忠実な実現ではないかもしれないが、ひとつの段階を画するものであった。東海大学の飛躍的發展が明白な形をとって現れ、その教育の中心が湘南校舎へと移っていったのはこの時期であるが、文明学科の設立によってひとつの役割を果たした文明研究所に、多様な役割が加わったのはこの時期であった。研究所が東海大学の教養教育体系の整備充実に関わるようになったのである。

その第一は、東海大学が全学生に必修として課してきた「現代文明論」の授業の運営が、文明研究所に託されたことである。周知のように授業としての「現代文明論」は、当初は松前重義総長が全学生に一人で行っていた講義であった。大学の発展にともなって学生数が増大し、他方では総長の多忙度もましてくると、当初の形での「現代文明論」授業の実施は物理的に困難となり、総長を中心とする主要な数人の教授たちが分担して担当するグループの授業となり、その採点や成績については、当初から文明研究所の一員であった尚樹が担当した。しかしこの方法でも、「現代文明論」の授業を円滑に運営してゆくには、多くの困難が起こるほど大学の変貌はめざましかった。1960(昭和45)年「現代文明論」の授業運営が文明研究所の所管となり、「現代文明論」は全学が協力して行う授業へと展開していった。1972(昭和47)年尚樹は現代文明論採点委員会委員長を命ぜられ、この体制を整備する仕事を担当した。そして文明研究所はこの体制を作り、育てあげたのである。こうして文明研究所は「現代文明論」の授業運営に責務を負うことになった。当初、松前重義総長の学問的理想を実現させるための研究機関であった文明研究所は、いまや教育の面においても、他のどこの大学においても行われていない独自の教養教育科目を生み出したのである。我々はこれを誇りにしてよいと思う。

その第二は文明研究所が、これまでの純粋に研究活動だけを分担する機関ではなくて、大学の一般教育を

担当することになったことである。それまで一般教育の人文科学系列の科目を担当する教員は、文学部の中に人文研究室として集合していたが、このグループと文明研究所とが合併し、これまで文学部やその他の学部に所属する専任教員の兼務によって構成されていた文明研究所が、それ自体の専任教員をもつようになった。これはその後たんに人文科学系だけでなく、社会科学系、自然科学系の専任教員を充実させてゆく端緒となって、今日の形のような本学独自の一般教育の体制を作ることになった。すなわち本学の一般教育は、「現代文明論」をその中核として、文明研究所が担当するという教育の体系が整えられたのである。

文明研究所のこのような変化が、文明研究所本来の研究活動を疎かにしてよいという発想にもとづくものではないことは言うまでもない。1971(昭和46)年発行が中断していた『文明』の第6号が発行された。その装いは初期の形を変えて現在のものになり、掲載の内容も研究論文のみでなくひろがったことを逢坂、堀越両氏の名になる同号の編集後記が伝えている。研究所の中に多様な研究グループが生まれてくるのもこれ以後のことで、現在は文明研究所から分離して足利記念バルカン・小アジア研究センターの研究活動となっているバルカン・小アジア研究が始まるのもこれからである。

以上文明研究所の昔を回顧した。しかしそれはたんなる回顧のためでなく、新しい飛躍のための回顧としたいという思いをこめてである。

【付録Ⅱ】

文明研究所歴史断章

玉井 治

文明研究所の歴史的な性格を略記するにあたり、手元に置くことのできる資料は、事務所に保存されている古い大学ノート8冊、住所録1冊と、創設当時の活動記録『文明研究所日誌』（昭和34年5月12日～昭和35年9月27日）の項を巻末に掲載した機関誌『文明』第1号（昭和37年2月15日発行）である。

大学ノート8冊の内容は次の通り：

- 資料(A) 『記録』((1)「会議録」[昭和39年4月27日～昭和40年9月7日]、(2)「研究会記録」[昭和39年4月23日～昭和40年9月7日])
- (B) 『文明研日誌』((1)「日誌」[昭和43年10月11日～昭和44年5月1日]、(2)「現代文明論採点委員会記録」[昭和44年5月25日～昭和46年12月17日])
- (C) 『住所録』、(D) 『住所録』
- (E) 『機関誌』（受贈機関誌一覧）
- (F) 『発翰簿』（寄贈雑誌、郵便関係）
- (G) 『物理学史研究』（発送記録）
- (H) 『事務用品費』（会計記録）

『文明』第1号の巻頭には原田敏明初代文明研究所長の「創刊のことば」があり、その一節が次のような、研究所創設の事情を教えてくれる。

「そもそも当研究所は、東京における本学文学部の再出発に際し、新興の大学としての特色ある文学部を作ろうという構想の中から生まれた。当初、既成の大学の学科編成にとらわれることなく、新しい学問的理想をもった文明学科として準備されたのであったが、学内外の事情はこれを時期尚早であるとし、文明研究所として発足させたのである…」

『文明』第1号巻末の「文明研究所日誌」冒頭の記

事は昭和34年5月12日の第1回所員会議に関するもので、決定事項は

① 研究所人事の発令 ② 研究嘱託

③ 研究所

④ 図書委員、所報、研究室

の各項目にわたっている。このうち①では所員（兼幹事）として2名、所員3名、研究員3名、研究嘱託2名、計10名の氏名があげられ、③では月例会での個人発表、これについてのシンポジウムを行なうことが決められている。第2回所員会議（5月26日）では所報として『文明』の発行を決定。なお第1回研究会（6月22日）の記録は

研究発表者 尚樹啓太郎所員

題目「初期ビザンツ文明における東方的要素」

となっている。文明研究所は、ここにその第1歩を刻んだことになる。「文明研究所日誌」は、昭和35年9月27日付、研究会の記事で終わっている。『文明』は現在、第62号まで刊行されているけれども、巻末に「日誌」を掲載しているのは、この第1号のみである。この記事に続く4年間の活動を示す資料は、文明研究所事務室には残されていない。

昭和39年4月27日の「第1回文明研究所会議」の記録が、上記の資料(A)に見られる。この会議の出席者は、原田所長ほか6名となっている。記事は、下の各項目についての簡単なメモ程度のものである。

○ 所員紹介 ○ 報告 ○ 『文明』について

○ 研究所会議について

○ 研究会の報告 現代科学研究会 ヨーロッパ研究会

このメモで目につくのは「所員紹介」という項目で、手元に資料のない空白の4年間にも活動が続けられていたとすれば、改めて「紹介」というのも奇妙なことと思われる。しかし新年度を迎えて新所員の参加があったとも考えられよう。いま一つは、研究会が2種類に分かれていることである。資料(A)の第2、3頁は「第2回研究所会議」の記録で、記事は

① 『文明』について ② 研究活動 ③ 図書整理

④ 文献蒐集 ⑤ 報告事項

となっている。これ以前の会議は史学研究室で開かれており、会場名として文明研究所が登場するのは、こ

れが最初である。『文明』はすでに7号の予定まで「議事」となっており、刊行物として「文明研究所シリーズ」の名前が出てくる。[これは現在「東海選書」と改名され、30点を越えるシリーズものに成長している。]この会議で名前のあがっているものは

兼岩正夫著『西洋中世の歴史家』

デュプレ・レイコフ著、中山茂訳『科学と国家』

下村寅太郎『西田幾多郎』

の3冊であり、これらについては『文明』に書評を掲載することが決められている。会議記録は以上で終わり、ノートの後半には昭和39年4月23日の「現代科学研究会」に始まり、昭和40年9月7日の同研究会に至るまでの10頁にわたる研究会記録がある。二つの研究会が交互に開催される形で、この1年半の間に45回を数える。出席者はいずれの研究会も発表者を含めて、常時2~3名で、ほぼ同じ顔ぶれである。

これに次ぐ記録として残されているのは「文明研日誌」と題されたノート資料(B)で、約3年後に「1968年(昭和43年)、10月11日(金)曇」と書き始められている。文字通りの日誌で、1969年5月1日まで先細りに、断続的に書きつがれている。「予算の件については、ワケというものは決められていないので、文明研で必要なときに応じて所定の手続きを経て金をもらうという方法が妥当なのではないか」ということで話が決まる」といった記述に出会うと、微笑ましくなる。「1969年日誌はじめ」とあって、「文明研究所として本年は再起の年である」と1月某日に記されているが、どのような意味の「再起」かは不明である。

研究会の記録は1969年10月27日に始まるが、回数、日時、講師名を略記した乱雑なメモで、12月15日の研究会(原田所長発表)についてのみ、4頁にわたる筆記者の聴講メモがある。これらの記事で気づかれるのは、所長を除きメンバーが一新していることで、「記録」ノート資料(A)の研究員が西洋史、西洋思想史、科学史研究者であったのに対し、「文明研日誌」ノート資料(B)では、日本史、中国史、思想史研究者で占められている。ノート資料(B)では、上記の記録に続いて2頁以後に1970年5月25日付で座談会の記録がある。これは「現代文明論」講師の座談

会で、従来の研究会活動とは無縁のもの。記録者も出席者も一変している。これ以後、35頁に及ぶ記録のうち研究活動に関するものは、わずかに1頁で、この時期の文明研究所の変貌ぶりをうかがわせる。このノートからみるかぎり、研究所は「現代文明論」事務室の観を呈している。

文明研究所が10名たらずの、人文・社会系一般教育科目担当者をメンバーとする人文科学研究室と合併し、現在の形を取るのには10余年前のことであり、さらに本来の研究活動の勢いを取り戻したのは、ほんの数年前からのことである。

注

- 1 齋藤博(1931-2020)は1964年~2001年に東海大学に在職し、文学部長、文明研究所所長、図書館長を歴任。哲学者として東海大学の文明論研究を牽引した一人。
- 2 筆者の一人(平野)は、齋藤博が講演で、東海大学の現代文明論の根底には骨太の哲学があるとしてその意味を語ったことを記憶している。ただし、資料が残っているかどうか検証中。
- 3 下村寅太郎(1902-1995)は日本を代表する哲学者、科学史家。東海大学での在職の経歴はないが文明研究所の設立当初から研究会活動と深い関りをもつ。永井博(1921-2012)は1984年~1993年に東海大学に在職した哲学者。下村を師事し、齋藤博の直接の指導教官であった。齋藤博に関しては注1を参照のこと。これら3名の哲学者と本研究の関りについては、それぞれに関する今後の議論(別稿)のなかで紹介する。
- 4 ここでは、「東海大学建学の思想とその源泉」(東海大学総長松前達郎)と題された理事長室編(2019年6月改訂版)を参照した。
- 5 松前重義(1971)、「現代文明と東海大学の精神」、『文明』、東海大学文明研究所、第8号、pp.21-35。
- 6 東海大学文明研究所の設置経緯に関しては、以下の「巻頭言」でも多少ふれている。
平野葉一(2024)、「巻頭言—文明研究と総合知」、『文明』、東海大学文明研究所、No.34、pp.iii-iv。
- 7 東海大学は1950年に旧制大学から新制大学へと移行するが、清水からの移転に伴って新たな文学部開設を計画した。
- 8 本稿では、文明研究所と文明研究の関わりについてその最初の段階に言及する。『東海大学五十年史』によると、創設から1990年頃までは、初代所長を原田敏明、第二代所長を学長であった松前重義が務め、その後足利惇氏、尚樹啓太郎、齋藤博先生、玉井治と続く。ただし、尚樹「創設

- のころ」によると初代と第二代の所長の順は逆になっている。
- 9 これら二稿の『東海大学文明研究所所報』における収録は以下のとおり：
尚樹啓太郎（1988），「文明研究所創設のころ」，東海大学文明研究所，No. 3（1988），No. 4（1989）に継続して掲載後，No.6（1991）に全体を再掲載。
玉井治（1988），「文明研究所歴史断章」，東海大学文明研究所，No.3（1988）に掲載後，No.6（1991）に再掲載。
- 10 原田敏明（1962），「創刊のことば」，『文明』，東海大学文明研究所，第1号，pp.1-2.
- 11 「東海大学文明研究所規則」．ここでは，『文明』，第1号，1962年，pp.122-123から引用．この規則の末尾には「本規則は昭和34年4月1日から実施する」と記されている（これは同時に文明研究所の設置年を示している）．なお，この尚樹の記述では，この「規則」は当時の文学部スタッフが議論を重ねて策定したと説明されている．
- 12 足利惇氏（1988），『足利惇氏著作集 第三巻——随想・思い出の記』（尚樹啓太郎，渡瀬信之編）東海大学出版会．
本稿の内容は，齋藤博「足利先生のこと——文明学科の構想」を参照した．
- 13 ここで“discipline”は個別の「専門的学問」，「専門分野」，「個別科学」を意味するが，本稿では“discipline”のまま用いる．
- 14 筆者のグループでは，21世紀のかなり早い時期から学問の総合について検討してきたが，文明研究所コア・プロジェクトの一環として2020年度から「超領域人文学の構築」，2023年度から「人新世（Anthropocene）における人文知」をテーマにプロジェクト研究を実施してきた．
- 15 ここでは，数学理論の展開を中心とした「内的理論史」（internal history）と教育や社会の要求などをふまえた「外的要因史」（external history）の総合としての総合知の可能性が示唆される．科学史や数学史における「全体史」に関しては以下を参照のこと．
平野葉一（2005），「Trans-Discipline から見た科学・数学」，『文明』，東海大学文明研究所，No.7，pp.52-59．
平野葉一，中村朋子（2014），「学問史から見た数学の展開」，『文明研究』，東海大学文明学会，第33号，pp. 41-54．
Sei Watanabe, Yoichi Hirano (2024), “Synthetic knowledge in civilization studies,” *Civilizations*, Institute of Civilization Research, Tokai University, No.35, pp. 57-64.
- 16 M. シェリフ, C.W. シェリフ（1971），岡博監訳，『学際研究 = 社会科学のフロンティア =』，鹿島研究所出版会，（原著は1969年，ここではp. 3から引用）．
ここには訳註で，学際的研究として，Multi-disciplinary, Inter-disciplinary, Cross-disciplinary, Trans-disciplinary が順に記され，Inter-disciplinary では複合された専門領域の境界に目が向けられ，そこから新しい構造が生じるのに対し，Cross-disciplinary では複合された discipline のそれぞれに妥当する新たな discipline が求められると説明されている．
- 17 伊東俊太郎は，人間の生活体を球体にたとえ，その内核（inner core）に文化を，外殻（outer shell）に文明を配し，内核をいわばその集合体の精神性の根源（エートス）として位置づける．伊東のこの議論は以下の文献以外にもさまざまな研究に見出される．
伊東俊太郎（1985），「比較文明論の枠組み」，『比較文明』，比較文明学会，第1号，pp.2-17．
- 18 神川正彦（1929-2009）は哲学者，比較文明学者．比較文明学会において創設期から中心的役割を果たした．神奈川大学において重職を歴任した．文明研究所では文明理論研究会に参加し，『文明』にも論文を寄せている．
神川正彦（1988），「比較文明とは何か—方法を通して」，『文明』，東海大学文明研究所，第54号，pp. 23-48．
- 19 神川は従来からの discipline が排他的であるが故にそれが「切断の方法論」をとるとする．これに対し，人間社会が諸要素が複雑に絡み合った脈絡のなかで構成されることを考慮し，文化や文明を見るためには個々の discipline がただ肩を寄せ合うだけではなく，複合的に連関する「接合の方法論」が求められるとする．
- 20 本研究では以下の論文を参照した．なお，神川の文明論は今日の文明の捉え方を再考するうえで示唆に富むものであり，その詳細は別稿で検討する予定である．
神川正彦（1990），「方法の必要性—問題設定と解明のために」，『比較文明』，比較文明学会，第6号，pp.11-24．
神川正彦（1996），「文明の転換と価値の転換—価値哲学の立場から」，『比較文明』，比較文明学会，第12号，pp.6-18．
神川正彦（1999），「比較文明学の学的基本性格」，『比較文明学の理論と方法』，朝倉書店，pp.176-191（第11章）．
- 21 神川（1990）pp.17-19を参照して筆者が整理．
- 22 伊東俊太郎（1985），「比較文明論の枠組み」，『比較文明』，比較文明学会，第1巻，pp.2-17．
- 23 齋藤博（1987），「文明研究所の理念」，『東海大学文明研究所所報』，東海大学文明研究所，No.1．

パドヴァ司教ヤコポ・ゼーノと「建築的扉絵」

松下 真記 東海大学文学部非常勤講師

〔論文〕

Jacopo Zeno, Bishop of Padua, and the Architectural Frontispiece

Maki Matsushita

This paper reexamines the intellectual career of Jacopo Zeno (c. 1418-1481), Bishop of Padua, focusing on his choices in book illumination and the forms of visual literacy that supported them. Zeno traveled between Padua and Rome, encountering diverse book cultures and thereby developing a deep and discerning knowledge of manuscript illumination. Even at the dawn of printing, he consistently emphasized the traditional canons of manuscripts and their humanistic cultural context that shaped their decoration.

The “architectural frontispiece” introduced in a volume of Pliny’s *Natural History* printed in Venice in 1469 by Spira (conserved in the Classense Library, Ravenna, ISTC ip00786000) was a visual innovation marking the rise of printing. Still, Yet Zeno likely saw it not as an innovative decorative style but as a foreign element that deviated from established manuscript conventions. Drawing on Zeno’s lifelong knowledge of decorative styles, his close relationship with the illuminator Niccolo Polani, and his stylistic guidance to Giovanni Vendramin, this study argues that, despite technological advances in printing, Zeno maintained a deliberate commitment to the visual codes of manuscripts. For him, the distinction between printed and manuscript books was secondary to his deep loyalty to the traditions and principles of the book culture he had acquired in Rome.

His collections from 1469 onward, with their complex interweaving of white grapevine decorations, classical motifs, and architectural frontispieces, thus reflect a moment of stylistic tension and experimentation at the beginning of a major turning point in the history of the book.

I. はじめに：問題の所在と研究史

パドヴァ司教ヤコポ・ゼーノ（生没 1418/22-1481年、フェルトレおよびベッルーノ司教職在任 1447-1460年、パドヴァ司教職在任 1460-1481年）は、若年期より書籍蒐集に熱心であった。彼の没後に遺された蔵書の多くは現在パドヴァのカピトラレ図書館に所蔵されるが、その中には手写本はもちろんのことインクナブラ（1500年以前に印刷された初期印刷本）も含まれている。

ヤコポ・ゼーノは、親族が教皇に即位したことを契機として、教皇庁での栄達を期待して1464年ローマへ赴いた。希望を失意に塗り替えて1469年にパドヴァへ帰郷するまでの間、彼はローマにて、手写本の

蒐集に精力的に取り組み、書物の筆写・装飾・献呈を通じたローマの人文主義的知的交流に積極的に参与した。

ローマにおける書物の制作や流通およびその装飾の隆盛を目の当たりにしていたゼーノは、1469年にパドヴァへ帰還した直後、ヴェネツィアで初めて印刷されたインクナブラの一冊、プリニウス『博物誌』（ラヴェンナ・クラッセンセ図書館所蔵二巻本, Inc.670, ISTC ip00786000, 以下「ラヴェンナ所蔵本」と略記）を手にすることとなる。

ヤコポ・ゼーノの所有となったこのラヴェンナ所蔵本の第一巻扉には、スクアルチオーネ工房に学んだ画家ジョヴァンニ・ヴェンドラミンによる独創的な「建築的扉絵」装飾が施されている【図01】⁰¹⁾。頁全体にモニュメンタルな古代風建築が描かれるこの新意匠「建築的扉絵」がラヴェンナ所蔵本に初めて描かれた経緯およびその意義については別稿にて詳述したが

本論文は、『文明』投稿規定に基づき、レフェリーの査読を受けたものである。
原稿受理日：2025年12月4日

(松下 (2026 予定)), 後述するように, この意匠の発案はヤコポ・ゼーノ自身ではなく, 印刷業者および挿絵画家側によって主導された可能性が高いと推察される。



図 01 Ravenna, Biblioteca Classense, Inc.670/l. プリニウス『博物誌』Plinius, *Historia Naturalis*, Venezia, stampato da Johannes de Spira, 1469, c.1r Giovanni Vendramin.

本稿の目的は, ヴェネトを中心に過ごした若年期を経て特にローマ滞在中に多様な書物装飾を実見してきたヤコポ・ゼーノの人生と書物の関係を振り返りつつ, ヴェネツィアで初めて印刷されたインキュナブラの一冊すなわちラヴェンナ所蔵本に施された「建築的扉絵」装飾が, 彼の書物装飾の視覚的経験と様式受容の慣習と照らし合わせてどのように見えていたのかを検討することにある。この斬新で画期的な扉絵用意匠は, 印刷術のヴェネツィアへの到来を祝福する象徴として, 新技術にふさわしい革新的な装飾意匠として歓迎されたのか。あるいは, 従来の書物文化との乖離に大きな違和感を覚えつつ困惑と共に受容されたのか。これについて, ゼーノがパドヴァ帰還後に蒐集した書籍の装飾様式を分析することにより, 一定の仮説を提示したい。

研究史について触れておく。15 世紀ローマの写本装飾に関しては, ルイスシャールトの様式分析に基づく重要な研究成果を基にして (Ruysschaert (1968)), 近年, ローマ教皇庁およびその周辺における人文主義

者たちの間で流通していた書物とその装飾に関する美術史的研究や (Zabeo (2014)) (Zabeo (2017)), 15 世紀後半の教皇庁宮廷における書物の献呈や著作を通じた人文主義的交流に関する文献学的研究が進んでおり (Torch (2024)), さらにはスビアコおよびローマで制作されたイタリア最初期の印刷本とその装飾に関する研究も深化した (*Subiaco 1465* (2015)) (Davies (2015)) (*La Stampa romana* (2016)) (Davies (2016)) (*Print and Power* (2021))。他方, 「建築的扉絵」研究についてであるが, これには美術史的にはアームストロングらによる古典的研究を嚆矢として (Armstrong (1981)) (Corbett (1981)), 建築様式や破れ紙のイリュージョニズムに着目した論考などがある (Estevez (2004)) (Andrews (1999)) (Herman (2011))。また, 現在パドヴァのカピトラレ図書館に所蔵されるゼーノの蔵書とその装飾は近年に再確認が行われた (Fumian (2014))。

それでは, これらの先行研究を踏まえ, 本稿ではヤコポ・ゼーノが特にローマにおいて接した書物装飾の様相を具体性を持って再構成しつつ, 新意匠の「建築的扉絵」の受容について考察することとするが, まずはその前段階として, ヤコポ・ゼーノの人生を書物装飾との関係から三期に分けて振り返り, なかでも第二期にあたる 1460 年代後半のローマ滞在期がその後の彼の書物装飾の評価基準を決定づける重要な時期となっていたことを確認する。

II. ヤコポ・ゼーノの人生と書物装飾

ヤコポ・ゼーノは 1418 年初頭, 15 世紀の間に三名の教皇 (グレゴリウス 12 世 [在位 1406-1415 年], エウゲニウス 4 世 [在位 1431-1447 年], パウルス 2 世 [在位 1464-1472 年, 生没 1417-1471 年]) を輩出したヴェネツィアの名門貴族の一員として誕生した⁰²⁾。ゼーノは, とりわけ後に教皇パウルス 2 世となるピエトロ・バルボとは年も近く, 幼少期より親密な間柄にあった。

書物との関係について考えるとき, 彼の人生は三つの時期に大別できる。

第一期はパドヴァを中心として過ごした若年期から

壮年期に至る 1464 年までである。1429 年、11 歳のゼーノはパドヴァ大学に入学し、著名な学者たちの薫陶を受けながら学問を修めた。1440 年 8 月には、同大学において民法および教会法の両分野における博士号を取得している。在学中の 1433 年には、母の死を悼む書簡文学を著し、早くも文筆活動に取り組んでいる。また、彼が 11 歳でキケロを転写した写本や、1445 年に大学の書物管理人 (bidello) から書籍を購入した記録なども残されており、書物への関心と実践的な関与は若年期より顕著であった (Bianca (2024))。

宗教界では、ゼーノは 1444 年までには教皇庁副助祭 (suddiacono apostolico) に任命されており、この頃よりローマに滞在していたようである。1440 年代にはフィレンツェ公会議 (1439-1443 年) およびローマ公会議 (1443-1445 年) に出席して教皇庁の高官や各地の人文主義者との交流を深めた。1447 年 4 月にはベッルーノおよびフェルトレ両地域の合同司教に選出され、1449 年 3 月には教皇庁審議官 (referendario apostolico) に任命された。1460 年 5 月、ヴェネツィア共和国政府の推薦を受けたゼーノは格式高いパドヴァ司教の座に就任し、パドヴァに戻った。しかしこの任命には、教皇庁とヴェネツィア共和国との複雑な権力争いが背景にあり、教皇ピウス 2 世の推薦で当時ヴィチェンツァ司教だったピエトロ・バルボが一度は同職に任命されるものの、その直後にヴェネツィアに推されたゼーノが取って代わったという経緯があった。そのため、ここにおいてゼーノとピエトロ・バルボの関係には深刻な亀裂が生じるに至った。

白蔓文様を含む『祝辞』【図 02】や『カルロ・ゼーノの生涯』【図 03ab】、網目文様を含む『ニココロ・アルベルガーティ伝』【図 04】など、この若年期に由来する写本が現存している。これら三点の装飾については、ヤコポ・ゼーノの書物の美術的側面への早熟な関心を示す重要な史料として次章で触れる。

第二期はローマ滞在期である (1464-1469 年)。1464 年、同郷で遠戚の幼馴染であるピエトロ・バルボが教皇パウルス 2 世として即位したことを受け、ヤコポ・ゼーノは教皇庁での出世を願ってローマへ移住した。

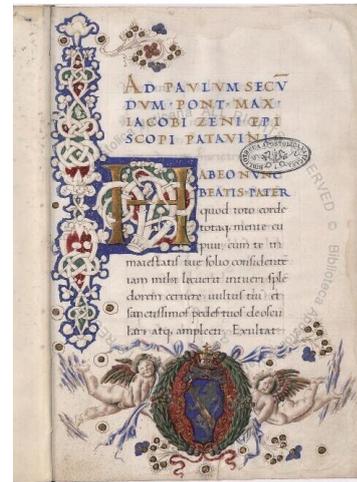


図 02 Biblioteca Apostolica Vaticana, Vat. lat. 3704.
ヤコポ・ゼーノ『祝辞』Iacopo Zeno, *Oratio gratulatoria*, copia di dedica per Paolo II, 1464, c. 1r, Niccolò Polani e aiuto.



図 03 Yale University Library, ms. 2.
ヤコポ・ゼーノ『カルロ・ゼーノの生涯』Iacopo Zeno, *Vita Caroli Zeni*, copia di dedica a Pio II, 1458-1459, c. 1r Niccolò Polani. (左から) a. 全体 b. 部分



図 04 Biblioteca Apostolica Vaticana, BAV, Vat. lat. 370 3.
ヤコポ・ゼーノ『ニココロ・アルベルガーティ伝』Iacopo Zeno, *Vita illustrissimi ac reverendissimi patris Nicolai Albergati*, c.1r, copia di dedica per il card. Pietro Barbo, 1451-1460, c. 1r Niccolò Polani.

このローマ滞在期に、彼は今までとは比較にならないほど大量の書物を実見したと思われる。というのも、書物は教皇庁の複雑な人文主義者のネットワークに参加するための必須アイテムであったからである。当時、教皇庁の実力者や人文主義者たちは、本を献呈したり贈呈したり貸したり見せたりという活動を通して、仲間であることを確認し合っていた (Torchi (2024))。

ヤコポ・ゼーノのローマの邸宅には、おそらく「写字室」が設けられていた。彼は自ら筆を執ることもあったが、同時に複数の写字生および装飾画家を抱えていた可能性が高く、近年では彼が自邸にて写本制作のための高度な分業体制（かつ大量生産体制）を構築していたと推察されている (Mariani Canova (2014:506)) (Zabeo (2017:226, 230))。彼がこのような文化のただ中に身を置き、自らの写字室を通してさまざまな写本制作の企画・制作・監修に深く関与していたことは疑いない。

ヤコポ・ゼーノがローマで日常的に目にしていた写本装飾はどのようなものであったのだろうか。1460年代後半のローマにおいて一般的に流通していた写本装飾様式については、次章にて、様式ごとにヤコポ・ゼーノと関連付けながら概観する。

そして第三期はパドヴァ帰還期である (1469-1481年)。1469年ヤコポ・ゼーノはローマでの生活に見切りをつけてパドヴァに帰還することを決意した。彼は1481年に没するまでパドヴァで過ごすことになるのだが、ゼーノは司教としての任務を遂行しつつ、司教座邸宅にはやはり写字室および図書館を設けて、パドヴァでも数多くの本の制作や装飾に関わっていた。

折しも1469年、ドイツ人の印刷業者がヴェネツィアで初めてのインキュナブラを制作し、そのうちのプリニウス『博物誌』の一冊がヤコポ・ゼーノの蔵書となった (ラヴェンナ所蔵本【図01】)。この本には「建築的扉絵」という今まで存在しなかった革新的な構図が採用されていた。しかし、当初ゼーノはそれにあまり関心を示さなかったようであり、「建築的扉絵」がゼーノの本の装飾語彙の中に常備されるようになるのは数年後のことになる。「建築的扉絵」への数年間の無関心とローマの書物装飾文化の踏襲が見られるこの

第三期については、次々章以降で論じることとする。

ちなみにゼーノは1481年に突然亡くなり、彼の図書館は略奪の憂き目に遭った。次のパドヴァ司教ピエトロ・フォスカリが懸命に回収したが、それでも蔵書の三分の一ほどしか戻らなかったと言われている。回収されたゼーノの蔵書は、現在パドヴァのカピトラレ図書館に所蔵されている (Bellinati (1999)) (Pantarotto (2017))。

Ⅲ. ヤコポ・ゼーノと1460年代後半ローマの書物装飾

ヤコポ・ゼーノの人生を振り返ると、前章にて第二期と呼んだ1464年から1469年にローマで見たさまざまな書物装飾の経験が、彼の中にひとつの重要な評価指標を形成したことは間違いない。それでは、彼がローマにおいて日常的に目にしていたような写本装飾とはどのようなものであったのだろうか。ここではゼーノの書物装飾の視覚的経験を再現することを試みる。

1460年代後半のローマにおいて人文主義者や宗教者の間で一般的に流通していた写本の装飾様式には、いくつかの主要な類型が存在していた。白蔓文様、花模様、網目文様などであるが、以下、それらをヤコポ・ゼーノの書物経験と照合させながら示すこととする。

1. 白蔓文様 (bianchi girari)

白色の蔓草が色面の上で相互に絡みつくように繁茂するこの文様 (ビアンキ・ジラーリ) は、元々は中世盛期の写本装飾を「古代風」と理解して手本としたフィレンツェ・ルネサンスの写本文化の中で生まれたものだが、15世紀後半にはローマでも広く受容されていた (Sean Daniell (1999)) (松下 (2024))。次第に、美しく精緻かつ生命感のある円弧が洗練されていったほか、白蔓文様の中に鳥や動物を入れ込んだり、別区画を作って風景や人物を挿入したり、具象的なモチーフや別種の文様スタイルと融合させたりなど、複雑な構成が自由に考案されるようになった。ゼーノが所有していた写本の中にもこの白蔓文様を用いた一級品が含まれている。

聖ヒエロニムス『書簡』【図05ab】は、彼がローマ

滞在時に入手した写本である。この扉絵には、当時のイタリアで白蔓文様の最大の巨匠として知られていたジョアッキノ・ディ・ジョヴァンニ・デ・ジガンティブスの手になる繊細華麗な白蔓装飾が一面に広がっている (Parole dipinte (1999: 262, n.101)) (I manoscritti (2014: 656-663, cat. 118) (Zabeo (2017:237)). 四重の金枠に絡みつきながら生い茂る豊かな白蔓の中には、鳥、プット、ウサギが目立たぬように描き込まれている。イニシャルの中には円形区画が作られ、空や岩山を背景に聖ヒエロニムスがライオンとともに描かれている。下辺に描かれたプットはヤコポ・ゼーノのステンマを支えており、彼の所有を証拠づけている。



図 05 Padova, Biblioteca Capitolare, ms. B 24. 聖ヒエロニムス『書簡』San Girolamo, *Epistolae*, stemma del Vescovo Jacopo Zeno, 1464-1469, c. 1r, frontespizio di Gioacchino de Gigantibus. (左から) a. 全体 b. 部分

先に触れたが、ヤコポ・ゼーノの写本には、ローマ滞在以前すなわち 1464 年以前すでにこの白蔓文様が見られる。

『祝辞』【図 02】は、1464 年、旧知のピエトロ・バルボが教皇パウルス 2 世として即位したことを受け、ゼーノが直ちにローマへ赴き、祝辞を献上すべく謁見を求めた際に、新教皇へ献上されたものである。しかし、実際には一か月間も謁見を待たされた上、素晴らしい祝辞を述べたにもかかわらず冷淡な対応を受けたと伝えられる (De Blasi (2020)) (Bianca (2024)).

ゼーノはこの献上用写本を用意するにあたり、将来

的な厚遇を期待して費用を惜しまず、著名な挿絵画家ニッコロ・ポラーニに装飾を依頼したとされる (Zabeo (2017) :246). 写本の左辺とイニシャル H のところには大振りな白蔓文様が描かれている。下辺欄外 (パ・ド・パージュ bas de page) には二人のプットが支える大きな月桂冠が描かれて、その内部には教皇冠と教皇鍵とバルボ家の家紋 (ステンマ) が配されている。

1458-1459 年頃に同じニッコロ・ポラーニによって装飾され、ゼーノから教皇ピウス二世へ献上された別の写本『カルロ・ゼーノの生涯』【図 03ab】も、白蔓文様を有している。これは偉大な指導者であった祖父カルロ・ゼーノの伝記であり、ヤコポ・ゼーノの著作中最も有名なものである (De Blasi (2020)) (Bianca (2024)). 四辺と金のイニシャル G の周囲に広がる美しい白蔓文様を観察すると、白蔓の中にウサギや壺などのモチーフを添えるアレンジが加えられていることに気付く。下辺欄外には教皇冠や鍵とともにピウス二世の家紋 (ステンマ) が描かれている。パドヴァにもほぼ同一の白蔓文様が描かれた別の一冊が残されているのだが、そちらは彼が自分の手元に残すために作らせたもので、ゼーノ自身のステンマが入っている (Zabeo (2017) :190-191).

このような現存例からは、ゼーノが白蔓文様についてパドヴァ若年期より知悉しており、所有や献上などのために描かせることができる立場にあったことがわかる。

2. 花模様

この様式には複数の下位分類が存在する。小花を密集させた総花文、肉厚で大ぶりの花卉が連なる装飾、花卉とこげ茶色の線描 (フィリグリー) と金泥の水玉模様を組み合わせた繊細な意匠などである。15 世紀中葉までの間にロンバルディアや北部から中部にかけてのイタリアでかなり広く普及していたこれらの文様のすべては、大まかに言って、かの有名なフェラーラの『ボルソ・デステの聖書』の何らかの影響下にあるものであった⁰³⁾。この絢爛豪華な『聖書』そのものに多彩な種類の花模様が存在しており、この大規模な写本装飾プロジェクトに関わったり、その影響を受け

たりした画家たちにより、こうした花模様は15世紀半ば以降のイタリアでは宮廷風の華やかさを演出するものとしてかなり広く普及していた。

これらの花模様においては、一つの扉絵の中に多彩なタイプの花模様が並存することに加え、別の文様やモチーフと共存することもあった。広がる花模様の中に区画を作り、そこに風景や人物を配して視覚的な豊かさを加えることも広く行われた。

ゼーノの所有する本では、花模様はもっぱら教会法の本のために利用されている。例えば、14世紀初頭の偉大な法学者オールドラドウス・デ・ポンテの『意見書』【図06】(Parole dipinte (1999: 266, n.103)) (I manoscritti (2014:694-700)) (Zabeo (2017:227-228)) では、左上方に、肉厚の花弁が変形して生まれたと思われる植物風のイニシャルIが金地を背景に大きく伸びやかに描かれている。左辺や下辺にはハイライトが目立つ総花文様が描かれている。一方、14世紀フィレンツェの教会法教授ラポ・ダ・カスティリオンキオの『陳述』【図07ab】(Parole dipinte (1999: 264, n.102)) (I manoscritti (2014:712-717)) (Zabeo (2017:228)) は全体の構成がよく似ているが、小花の間を縫うようにして描かれる繊細な線描が格段に増えていることが観察される。両方ともゼーノのローマ滞在期に彼のために制作された写本であり、下辺にゼーノのステンマが入っている。

当時流通していた花模様の別の例を挙げれば、パウルス二世へ献呈されたドメニコ・ドメニキ『教皇権力について』【図08ab】(Ruysschaert (1968:264)) (Zabeo (2017:212)) などもある。頁全体にわたって密度の高いフィリグリーと小花文様が描かれているが、この場合、花の中にプットや鳥などのモチーフがいくつも埋め込まれているのが見て取れる。また頁の上半分には大きめの区画が作られていて、その中には跪く著者が教皇へ写本を献呈する室内場面が描かれている。このように花模様では、さまざまなタイプの花模様の広がりや小モチーフなどが自由に組み合わせられていたほか、小区画との並置も自由に行われていた。ゼーノにはこの種の装飾を見る機会も多くあったことだろう。



図06 Padova, Biblioteca Capitolare, ms. A10. オールドラドウス・デ・ポンテ『法学意見書』Orlando da Ponte, *Consilia*, stemma del Vescovo Iacopo Zeno, 1464-1469, c. 1r Giuliano Amadei.



図07 Padova, Biblioteca Capitolare, ms. A9. ラポ・ダ・カスティリオンキオ『陳述』Lapo di Castiglionchio, *Allegationes*, stemma del Vescovo Iacopo Zeno, 1467, c.1r Miniatore dei Piccolomini. (上から) a. 全体 b. 部分



図08 Biblioteca Apostolica Vaticana, BAV, Vat. lat. 7628
ドメニコ・ドメニチ『教皇権力について』Domenico
Dominici, *De potestate papae*, copia di dedica a Paolo II,
ca. 1464, c. 1r scena d'offerta del libro, Miniatore dei
Piccolomini. (左から) a. 全体 b. 部分

3. 網目文様

編み込んだ色組紐か網目を思わせる幾何学的な文様はイタリア語で「cappio annodato (結び目のあるループ)」と称され、一般的に、金地や暗色を背景に、三色ほどに塗り分けられた太線が直線的に交差する構成を持つ。典型例はローマ＝カトリック教会とローマ教皇の権威を高め「大教皇」と称賛された5世紀の教皇レオ一世の説教と書簡を収めた『説教書簡集』【図09】(Toscano (2009)) (Zabeo (2017:191, 236))で、下辺欄外のピエトロ・バルボの紋章の左右には、この網目文様がニココロ・ポラーニによって描かれている。



図09 Biblioteca Apostolica Vaticana, BAV, Vat. lat. 547.
教皇レオ1世『説教書簡集』San Leone Magno, *Sermonese
Epistolae*, stemma del card. Pietro Barbo, tra VI e VII
decennio, c. 1r frontespizio a cappi intrecciati, Niccolò
Polani.

この網目文様は、15世紀半ばのパドヴァで知られていたカロリング朝写本の頭文字装飾の類型から派生したものであり、例えばパドヴァのカピトラレ図書

館所蔵の『ロタールの聖体儀礼書』【図10】(Barzon (1950: cat.1)) (*I manoscritti* (2014:63-69)) (Zabeo (2017:192))には、イニシャルTの中に単純ながらかなり規則性の強い網目文が見られる。こうした先例が「古代風」と理解されて模倣されることでこの種の網目文様がパドヴァで生まれ、15世紀後半になると、写本装飾のための古代風造形語彙の一つとしてローマでも普及した。

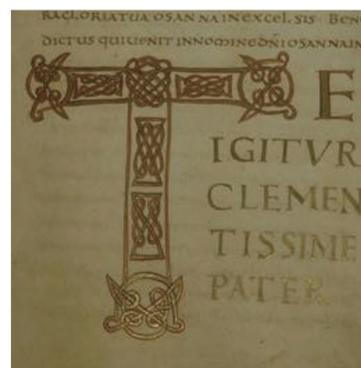


図10 Biblioteca Capitolare, ms. D 47.
『ロタールの聖体礼儀書』*Sacramentario di Lotario*, sec.
IX (metà), c. 92r iniziale a cappi T (Te igitur), Scuola di
Lotario.

この網目様式にも複数の下位分類が存在する。例として、少し時代は遡るが、1458年から1464年にニココロ・ポラーニが描いたピウス二世の写本を挙げる。三世紀ごろのラテン語文法学者ポンポニウス・ポルフィリオンによるこの『ホラティウス注釈』【図11abcd】(Ruysschaert(1968:257)) (*Vedere i Classici*(1996: cat. 93)) (Zabeo (2017:142, 186, 294-295))には、およそ三種類の網目文様が並置されている。下辺には正方形のマス目が並んだような直線的な文様が描かれるが、一方でイニシャルHの中には太さの異なる曲線が絡み合う植物風の文様が描かれており、さらに上辺と左右辺には、太い組紐をざっくり編んだようなループの連なりが規則正しく描かれている。

ゼーノがヴェネト出身であることを踏まえればこの様式への親近性は自然なものであり、実際『ニココロ・アルベルガーティ伝』【図04】に見られる通り、彼は若年期からこの装飾様式を知っていた。この本は若きゼーノが、フィレンツェ公会議において親交を深めたニココロ・アルベルガーティ枢機卿の早世(1443年)



図 11 Biblioteca Apostolica Vaticana, BAV. Chigi H.VII 229.
 ポンポニウス・ポルフィリオン『ホラティウス注釈』Porfirione, *Commentarii in Horatium*, stemma di Pio II, 1458-1464, c. 1r Niccolò Polani. (左から) a. 全体 b.c.d. 部分

を悼み、ベッルーノ司教在任中に執筆した伝記であるが (Zabeo (2017: 190)), 写本扉絵の下辺には、金地を背景にして、緑・青・ピンクの組紐が直線的に繰り返し編み込まれ、この装飾が既に見られる。イニシャル Q の内部に赤い枢機卿帽と左向きのライオンのバルボ家紋章が配されている通り、この本はピエトロ・バルボに献呈された。

4. 古代風モチーフなど

加えて、白蔓文様や花模様の中に装飾アクセントのようにしてしばしば差し挟まれるようになっていた、壺や燭台、武具甲冑、花綱、プットなどの古代風モチーフのほとんどは、石棺や石碑研究が盛んであったパドヴァに由来する考古学趣味のモチーフである。これらもまた 1460 年代後半のローマにおいては既に造形語彙の一つとして定着していたため、ゼーノの目には一般的なものとして映っていたことだろう。ゼーノ所有の聖ヒエロニムス『書簡』写本【図 05ab】の白蔓文様の中にも、プットが二人一組で何人か隠れているのが見える。ゼーノの著作『カルロ・ゼーノの生涯』【図 03ab】でも、白蔓文様の中に壺などが見える。

さらに、円形や矩形で区切ったエリアの中に、人物、動物、室内場面などの何か具象的な絵を描くということは、元々『ボルソ・デステの聖書』の時代から 15 世紀を通じてかなり一般的に行われていた。ゼーノ所有の聖ヒエロニムス『書簡』写本【図 05ab】でも円形区画が作られ、そこに荒野の聖ヒエロニムスが描かれている。

ゼーノの所有本ではないが、例えばピッコローミニの『世俗書簡集』【図 12ab】(*Dix siècles* (1984: 163-164)) (Zabeo (2017: 188) では、フィレンツェ由来の白蔓文様 (左・右・上段)、パドヴァ由来の網目文様 (イニシャル I) のほか、壺、プット、盾形紋章などの古代風モチーフが描かれており、さらには区画の中に室内で机に向かう教皇や都市風景なども描かれ、実に多彩な要素がにぎやかに共存しているのが観察される。当時の写本装飾では、このように様々な要素や様式が混在したまま、自由な構成でまとめられることも珍しくはなかったのである。この本は、ピウス二世 (エネア・シルヴィオ・ピッコロミーニ) の家紋が確認できるものの、装飾が一部未完成であるため、制作年は彼の 1464 年 8 月の逝去直前頃と推定されている。



図 12 Paris, Bibliothèque nationale de France (BnF), Latin 8578.
 エネア・シルヴィオ・ピッコローミニ『世俗書簡集』Enea Silvio Piccolomini, *Epistolae seculares*, stemma di Pio II, 1458-1464, c.5r Niccolò Polani. (左から) a. 全体 b. 部分

5. ニッコロ・ポラーニとの関係

ここで一度、何度か出てきた挿絵画家ニッコロ・ポラーニとの関係についてまとめておきたい。

ザベオによれば、ニッコロ・ポラーニは、教皇庁のルネサンス的写本文化の礎を築いたピウス二世の時代に、ヴェネツィアおよびパドヴァにおける古代趣味的装飾の革新者として登場し、その人文主義的装飾語彙をローマへ移入し流通させる立役者として活躍した人物である (Zabeo (2017: 190)). 司祭であり写本挿絵画家でもあったポラーニの名は、1459年から1471年にかけての教皇庁文書や名簿の中に複数記録されている (Müntz and Fabre (1887: 124)) (Zippel (1904-1911: 213-215)) (Zabeo (2017: 184, 230)). 彼がピウス二世没後、次代の教皇パウルス二世に継続して直接雇用された唯一のミニアチュール画家であったという事実は (Ruyschaert (1968: 257)) (Zabeo (2017: 184)), 当時の彼の技量の確かさと人気の高さを物語っている。

彼の規準作の一つとして挙げられるのがサント・ジュヌヴィエーヴ図書館に所蔵されるアウグスティヌス『神の国』【図 13ab】 (Zabeo (2014)) (Zabeo (2017: 74, 79, 185)) である。この本は、リンツ出身の写字生イオハネス・ゴベリーニの書いた奥付により1459年10月11日にマントヴァ公会議の折に制作されたことが明白であり、さらに扉絵にはニッコロ・ポラーニの署名と年記があるという点で、きわめて稀有な作例である。

四辺は、網目文を内側に含む金の太い枠組みと花模様で縁取られている。左上の大きな矩形には都市風景が描かれており、そのすぐ下の矩形には、葉飾りで象られたイニシャル「G」とともに、室内で執筆する聖アウグスティヌスの姿が表されている。

本論考の文脈で興味深いのは、右上に描かれた古代風の石碑である。これは区切られた矩形の内側ではなく、テキストと同じ平面上に直接描かれている。石碑の前面には大きな巻紙が垂れ下がっていて、そこには伝統的な手写本の書式に従い「アウグスティヌスの神の国、幸いにもここから始まる」と書かれている。イ

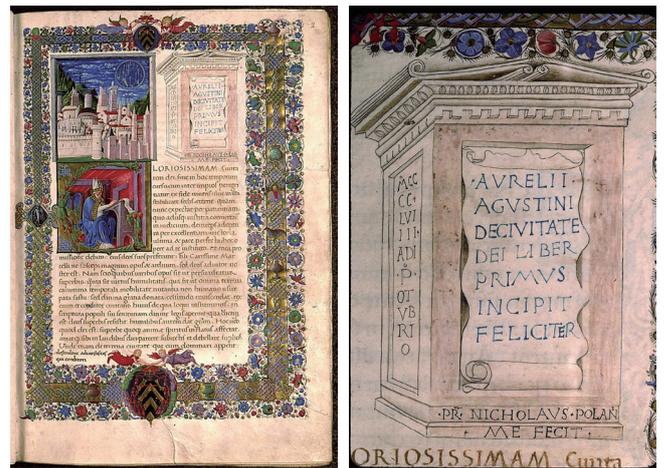


図 13 Paris, Bibliothèque Sainte-Geneviève, ms. 218. アウグスティヌス『神の国』Aurelius Augustinus. *De civitate Dei*. stemma aggiunto del card. George d'Amboise, in origine per Niccolò Forteguerra, copista Iohannes Gobelini da Lyncs, 11 ottobre 1459, c. 2r frontespizio firmato 1 ottobre 1459 da Niccolò Polani. (左から) a. 全体 b. 部分

ニシャル内のアウグスティヌスが黙々と執筆中の巻紙はこれなのだろうか。石碑の基台部にはニッコロ・ポラーニの署名が彫ったように描かれている。さらに三次元的に表現された石碑の側面では、奥行に従って並んだ文字が扉絵装飾の制作年を示している⁰⁴⁾。

このマントヴァ公会議(1459年5月-1460年1月)にはゼーノも参加していたと考えられ、ザベオはこれがニッコロ・ポラーニとヤコポ・ゼーノの確証できる最初の接点としている (Zabeo (2017: 191)). 既に触れた通り、ヤコポ・ゼーノはポラーニに対して、早い段階から、個人的な写本制作 (例: 『カルロ・ゼーノの生涯』【図 03ab】の自家用のスペア) のみならず、献呈用写本の制作 (例: 『祝辞』【図 02】、『カルロ・ゼーノの生涯』【図 03ab】) も依頼していた。ゼーノがパドヴァ考古学趣味の代弁者ポラーニに、ローマ滞在期よりも前から注目していたことは間違いない。

ところで、このような一流写本装飾画家が、通常の絵画の画家と比較してユニークに思われるのは、いくつもの異なる様式を一人で自在に操り、自由に組み合わせる能力をも有していたという点である。ニッコロ・ポラーニも、フィレンツェ風白蔓文 (例: 『祝辞』【図 02】) でもパドヴァ風網目文 (例: 『説教書簡集』【図 09】) でも、白蔓文の中に絡まる古代モチーフでも (例: 『カルロ・ゼーノの生涯』【図 03ab】)、花模様でも、

アウグスティヌスの姿でも都市風景でも、何でも描いているのである。一方で、得意ジャンルの異なる数名の挿絵画家が作業を分担したり、あるいは弟子や助手が手伝ったりするなどして、一枚の扉絵が複数の手によって仕上げられることも当然あった(例:『祝辞』【図02】の下辺の花模様は弟子の手とされる)。このような慣習のせいで、美術史家が挿絵装飾画家の手を分け帰属を確定させる作業には、しばしば大変な困難が伴う⁰⁵⁾。

以上、ヤコポ・ゼーノが1464年から1469年にかけてのローマ滞在期において実見した写本を中心に、当時流通していた装飾様式を概観した⁰⁶⁾。このようにヤコポ・ゼーノは、ローマにて、白蔓文様、花文様、網目文様を中心とする数多くの写本装飾や、あるいはそれらを自在に使い分けたり巧みに融合させたりしている数多くの写本装飾を見ていた。このローマでの濃密な写本経験が、彼自身の、さまざまな装飾様式の選択や組み合わせについての判断力や理解力を大いに育んだことは間違いない。そしてそれによって、ポラーニのような実力ある挿絵画家に適切な装飾を発注することも行われたのだろう。

この時期のローマでは、写本は、単なる学術資料や美術品にとどまらず、また教養や威信の象徴にとどまらず、政治的贈答や人的ネットワーク構築のツールとしても機能していた。いかなる書物を、いかなる装飾で、いつ、誰に献呈するかということは、トーチが繰り返し力説するように、当時のローマにおいては政治的行爲であった。血縁ではなく意志で参加していた教皇庁という疑似家族的共同体(聖職者である以上名目上は家族を持たない独身男性の集まり)の構成員は、お互いの中に血ではなく書物を絶え間なく流通させることで、仲間であることを確認し合っていたからである(Torchi(2024:89))。ゼーノは、ニコラウス・クザーヌス枢機卿、アンドレア・ブッシ、ベッサリオン枢機卿、ニッコロ・ペロッチェ、ポンポニオ・レトといった著名な人文主義者とともに、こうした書物文化の活況の中に身を置いていた。すなわち、ゼーノの写本制作・装飾・献呈活動もまた、教皇庁の複雑な人文主義

的ネットワークに参加するための重要な営為であったわけである。ローマの書物文化の慣習に従って適切な書物装飾を施すことは、教養や知性のみならず、知的社会への帰属意識の表明でもあった。従って、これら現存例やニッコロ・ポラーニとの関係性は、彼が書物を介したローマの政治、文化、人脈の中にいかに深く入り込み、同化していたかを示している。

さて、ヤコポ・ゼーノは1469年、教皇庁での栄達が出来ないことを受け入れ、名目上は執筆活動と健康維持のためであったが、ローマを離れてパドヴァに帰還することを決意した。そのような彼をパドヴァで待っていたのは一冊の新しい本であった。その本は手で筆写されたものではなく印刷されたものであるという点で新しく、また、従来の手写本の装飾慣習を無視して装飾されているという点でも、新しい本であった。

IV. ヤコポ・ゼーノと「建築的扉絵」

1. 1469年「建築的扉絵」の誕生とその意義

1465年、ドイツ人のコンラート・スヴァインハイムとアルノルト・パンナルツがイタリアに初めて活版印刷術を導入した。彼らはローマ近郊スピアコ山中の修道院で、さらに1467年からはローマで、書籍を印刷出版した。イタリア内で次いで活版印刷がもたらされたのは、ヴェネツィアであった。

ヤコポ・ゼーノがパドヴァに帰郷したのと同じ1469年のこと、ドイツ人ヨハネス・デ・スピラがヴェネツィアで初めて印刷を行い、ヴェネツィア共和国政府より印刷技術の独占権を獲得した。この年にスピラが印刷したプリニウス『博物誌(Naturalis Historia)』は100部であったが、そのうちの58点が現存する。そのうちの一冊がラヴェンナ所蔵本【図01】で、ヤコポ・ゼーノの蔵書となっていたものである。

最初期のインキュナブラはとりわけ手写本を真似て作られており、印刷後には手写本同様の装飾が手で施されることが期待されていた。現存する同版本の装飾様式をそれぞれ比較してみると、ラヴェンナ所蔵本【図01】のみが「建築的扉絵」と呼ばれる新意匠を有し、他と著しく異なる特徴を持つことが判明する(Mariani

Canova (1994a)) (Mariani Canova (1994b)) (De Nicolò Salmazo (1999))⁰⁷⁾.

他の現存する本の場合では、頁全体は文字テキストが載る平面として把握されており、主役の文字テキストに対して脇役の欄外装飾やイニシャル装飾が添えられるという、従来の写本装飾文法が踏襲されている。実際にこの1469年のスピラによる『博物誌』の現存例の多くは、当時の手写本によく見られる白蔓文様を用いて飾られていた(松下(2024))。

ところが、このラヴェンナ所蔵本の扉絵は、そもそも発想が異なる。紙面を単なる平面としてではなく三次元空間を描く支持体として捉えている点で、従来の写本装飾文法から著しく逸脱している。中心には古代風の建造物が大きく描かれ、その背後には風景が垣間見える。建造物の前面には大きな巻紙が吊るされており、画家に手渡される前にすでに印刷されていた文字テキストは、画家によってあたかもこの「描かれた羊皮紙」に記されているかのようにされている。つまり、主従が逆転し、文字は絵の中に閉じ込められ、絵画の三次元空間の中に従属する一部になったのである。「建築的扉絵」と呼ばれるこの革新的な意匠は、写本挿絵の専門画家ではなく通常の画家として修業を積んできたヴェンドラミンだからこそ成し得た自由な発想に基づくものだったかもしれない。

ジョヴァンニ・ヴェンドラミンはパドヴァのスクアルチオーネ工房で学んだ画家であり、マンテーニャやマルコ・ゾッポの弟弟子にあたる。スクアルチオーネの最晩年には「息子」(養子)として迎えられていた記録が残るが、師匠の死の前後に師匠の下を離れて、新事業を始めたばかりのヴェネツィアのスピラのもとに行ったとされる(Benetazzo (1999)) (Alberto Calogero (2018)) (Jacopo da Montagnana (2002))。

1469年、師を失ったばかりのヴェンドラミンはこの真新しい職業で成功する必要がある、野心家であったこの版元スピラに気に入られる必要があった。ここに描かれる「羊皮紙に羊皮紙を描く」というユニークなモチーフも、スピラの意を汲んで、印刷技術の革新性を視覚的に強調する意図を含んでいたかもしれない。というのも、これによって、権威ある古来からの

「羊皮紙の巻物」という媒体上に初めて「印刷文字」があることが明確に意識づけられ、プリニウスの巻末のコロフォンでスピラが強く主張する「手書きよりも読みやすい」という美点が強調されるからである(松下(2026 予定))。このプリニウスのコロフォンには、手写本は「不鮮明ときておりほとんど読まれうることがなかった」と書かれており、続いて、手写本から「学識と才能」を託されるものとして印刷術が新しく登場した旨が宣言されている⁰⁸⁾。

2. ヤコポ・ゼーノによる「建築的扉絵」受容

ラヴェンナ所蔵本に描かれた「建築的扉絵」は、従来の写本装飾とは一線を画す絵画的構成を持ち、印刷本における新たな視覚表現を試みていた。この扉絵がヤコポ・ゼーノによる明確な注文に基づいて制作されたという証拠はなく、論者は、以下のように、むしろ印刷業者側が、ゼーノの知的関心や美的嗜好を見越して意欲的に提示した作品であった可能性が高いと考える。

ゼーノの視覚的経験に照らすと、「石碑の前に全面的に巻紙を垂らす」というモチーフは彼にとってまったく未知のものではなかった。例えば、ニッコロ・ポラーニの前述の『アウグスティヌス神の国』【図13ab】には、まさにそのような構成が見られた。ゼーノとポラーニの親密な交流を鑑みれば、仮にこの作品を直接目にしていなかったとしても、ポラーニの造形語彙のなかにこうしたものがあることは把握していたことだろう。ゼーノ自身、パドヴァ大学の卒業生であり、パドヴァ司教としての立場からも、ローマにおいてパドヴァ趣味を体現できる画家としてポラーニを重用していた事実は、その知識と嗜好を裏付けるものである。

したがって、ラヴェンナ所蔵本の「建築的扉絵」に対してゼーノが一定の理解を示す素地は既に形成されていたと言える。もし、「石碑の前に巻紙を垂らす」モチーフが、複数の要素が並置される中の一つとして、視覚的にぎやかさや考古学趣味を演出する目的で用いられるならば、ゼーノはそれを好意的に受容したことだろう。

ところが、ヴェンドラミンによるこの扉絵は、頁全体に「絵画」を描くものであり、従来の写本装飾文法に縛られないまさに「型破り」なものであった。それゆえ、ゼーノの目には、写本装飾に求められる教養や文法的整合性を欠いたものとして映ったのではないだろうか。ゼーノは1469年にパドヴァへ帰郷した後、自身の写字室を設け、複数の写字生や装飾画家を雇用していたと推察されるが、次章で述べる通り、当初は、ローマで見慣れていた白蔓文様やパドヴァ風モチーフなど、伝統的な写本装飾様式を選択しているのである。おそらく「建築的扉絵」は、スピラとヴェンドラミンから見れば、印刷技術の革新性や優位性を視覚的に訴えるための画期的意匠であったかもしれないが、1469年のローマ帰りのヤコポ・ゼーノの目には奇抜に過ぎる「異形」のものに見えたと思われる。装飾慣習の遵守は人文主義的知性や教養の証であり、仲間の証でもあっただけに、積極的に受け入れる気持ちにはなれなかったのではなかろうか。少なくともこれを自ら注文したとは考え難い。

それでも、ラヴェンナ所蔵本を通じてヴェンドラミンと出会ったゼーノは、その画家としての技量には強く惹かれたようである。新意匠そのものにはすぐには関心を寄せなかったものの、ヴェンドラミンはその後ゼーノの写字室に加わり、パドヴァにおける蔵書装飾を担う代表的画家として活躍することとなった。つまり、ゼーノは「建築的扉絵」という表現形式には慎重であったが、ヴェンドラミンの挿絵画家としての腕前には高い評価を与えたと思われるのである。

V. ヤコポ・ゼーノと1469年以降のパドヴァの書物装飾

ヤコポ・ゼーノは1469年にパドヴァへ帰還したのち、およそ3年間は、自身の蔵書の装飾に「建築的扉絵」を積極的に採用せず、むしろローマで見慣れていた白蔓文様やパドヴァ風モチーフの挿入といった伝統的な写本装飾様式を選択していた。以下、1475年までのゼーノの本の装飾をいくつか確認して、伝統と革新が拮抗する様相を観察する。

1. キプリアヌス『書簡集』（1471年インキュナブラ）【図14】

3世紀のカルタゴ司教だった聖キプリアヌスのこの『書簡集』はスピラ工房にて1471年に印刷された(*Parole dipinte* (1999: 276, n.107))。この本の装飾の特筆すべき点は、四辺およびイニシャルを囲むのは緻密な白蔓文様のみであるという点である。印刷という新技術で作られたにもかかわらず、同じジョヴァンニ・ヴェンドラミンが描いたものであるにもかかわらず、そして「建築的扉絵」というパドヴァの新たなインキュナブラのための古代風意匠の洗礼を受けた後にもかかわらず、再び、レイアウト構成や意匠は伝統的な写本装飾の規範を忠実に踏襲することが選択されたことがわかる。下辺欄外中央ではいつものようにプットがヤコポ・ゼーノのステンマを掲げる。

ヴェンドラミンはゼーノと出会う以前、白蔓文様を描いた経験はなかったと考えられ、おそらく注文主の意向によってこの装飾技法を習得したのだろう。ゼーノからすれば、彼は書物装飾画家としていわば「指導」される必要があったと思われる。

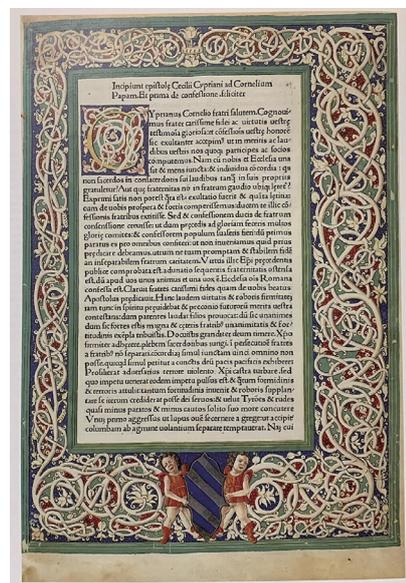


図14 Padova, Biblioteca Capitolare, Inc. 153. キプリアヌス『書簡集』1471年ヴィンデルリヌス・デ・スピラによってヴェネツィアで出版。San Cecilio Cipriano, *Epistolae*, Venetiis, Vindelinius Spirensis, 1472, miniato c.1471, c. 3r Giovanni Vendramin.

2. プラウトゥス『喜劇』(1472年インキュナブラ)

【図15】

この古代ローマの劇作家プラウトゥス『喜劇』はスピラ工房にて1472年に印刷された(*Parole dipinte* (1999: 274, n.106)). この本の装飾はジョヴァンニ・ヴェンドラミンの手によるもので、下辺欄外にはヤコポ・ゼーノのステンマが入る。印刷本ではあるものの、ここでもまた頁全体は平面的に捉えられ、その平面全体を広く飾るものとして白蔓文様を選択されている。

ただし、右辺と下辺の大きな円形区画にはプットが描かれ、左辺と上辺の小さな円形区画には古代貨幣に由来すると思われる肖像が描かれている。繁茂する白蔓を押し退けるようにして描かれたこれら円形区画は、独立した自分の領域を主張しつつパドヴァ風古代趣味を示している。



図15 Paris, Bibliothèque nationale de France (BnF), Rés. Vélins 563.

プラウトゥス『喜劇』1472年ヴィンデリヌス・デ・スピラとジョヴァンニ・ダ・コロニアによってヴェネツィアで出版。Plauto, *Comoediae*, Venezia, Vindelino da Spira e Giovanni da Colonia, 1472, miniato c.1472, c. B1 Giovanni Venderamin.

3. ヴルトゥリオ『戦争論』(1472年手写本)【図16ab】

リミニの僭主シジスモンド・マラテスタの宮廷にいた人文主義者ロベルト・ヴルトゥリオ(生没1405-1475)が15世紀半ばに書いた『戦争論』は大きな

評判を呼び、1472年にヴェローナで出版されるに至った。この手写本は、1472年にヴェローナで印刷されたその印刷本を原本として、それを手で筆写したものであることが判明している(*Parole dipinte* (1999: 280, n.109)). インキュナブラ黎明期にはこのように印刷本を筆写するという事例もあった。青い背景の中に人物像と白蔓文様が入り混じるこの奇妙で美しい挿絵は、一般にジョヴァンニ・ヴェンドラミンの手とされている。下辺には文字列と同幅の赤枠が作られ、その中にはゼーノの盾形紋章を支える武装したプットが配されている。

三辺には戦争に関する神々(ユピテル、クピド、マルス、ウルカヌス)や武具甲冑などが大きめに丁寧に描かれており、白蔓文様はイニシャル内と右辺に現れるのみである。古代モチーフからなる世界に白蔓文様が混入したようにも見える。右下の大壺と二人の人物像の部分は白抜きのみでおそらく未完であるのだが、この二人は獣足をしており、もはやプットではなく半獣神であることがわかる。

同じゼーノ所蔵の本でおそらく同じ1472年に同じ画家が描いた前述の印刷本プラウトゥス【図15】と比較すると、両者ともに、白蔓文様と古代モチーフが拮抗しながら折衷様式を作り出していることは同じである。一方は印刷本でもう一方は手写本でありながら、この二点では、文字テキストを枠で囲んで独立させた



図16 Padova, Biblioteca Capitolare, ms. D11. ヴルトゥリオ『戦争論』1472年、「IO.NY」と記銘する筆記者による手写本。Roberto Valturio, *De re militari*, 1472, miniato c.1472, c.1r Giovanni Venderamin. (左から) a. 全体 b. 部分

うえで、周囲を何らかの装飾（モチーフの種別とその面積比率の違いこそあれ）で埋めていこうとするその平面的コンセプトは変わらない。つまり 1472 年の時点では、印刷本であるかどうかには頓着せず、本の装飾は根本的に従来の手写本の装飾ルールに従っているのである。

4. マクロビウス『『ソムニウム・スキピオニス、サトゥルナリア』（1472 年インキュナブラ）【図 17】

5 世紀ローマの著述家・文法学者テオドシウス・マクロビウスのこの本は 1472 年にジェンソンによって印刷された。ヤコポ・ゼーノ所蔵のこの一冊にはヴェンドラミンの手に帰される扉絵装飾があり、ゼーノの家紋が左右と下に三度も描き込まれている。知られる限り、1469 年のラヴェンナ所蔵本以来、再び「建築的扉絵」がヤコポ・ゼーノの蔵書のなかに現れるのはこれが最初である（*Parole dipinte* (1999: 272, n. 105)）。

赤い枠組みの巨大な石碑がページの中央に立っており、その間隙の向こう側には枯れ木と切り株のある人気のない遠い風景と空が覗いている。石碑の上部には植物文の浮彫のあるブロンズ製の飾りが載っている。その左右に置かれた金の球体のおもりには紐がついていて、そこから吊り下がる果物が古代の祝祭的な雰囲気を高めている。垂れ下がる巻紙というモチーフは今回は採用されなかったことが分かる。台座部には紫の羽目板に華麗な植物文が彫られ、中央のヤコポ・ゼーノの家紋を飾っている。

さきほどのプラウトウス『喜劇』【図 15】とこのマクロビウス【図 17】は、同じ 1472 年に印刷された同じインキュナブラ（非手写本）である。所有者も装飾画家も同じである。ところが、前者では伝統的な手写本装飾文法に従った白蔓文様を含む折衷様式が選ばれており、一方こちらの後者マクロビウスでは新しい装飾様式の建築的扉絵が選ばれている。新意匠は、インキュナブラだから選ばれたというわけではないことがわかる。



図 17 Padova, Biblioteca Capitolare, Inc.249. マクロビウス『『ソムニウム・スキピオニス、サトゥルナリア』 1472 年ニコラ・ジェンソンによりヴェネツィアで印刷。Aurelio Teodosio Macrobio, *In somnium Scipionis expositiones. Saturnalia*, Venetiis, Nicholus Jenson, 1472, miniato c.1472, c.1r Giovanni Vendramin.

5. セネカ『哲学・書簡集』（1475 年インキュナブラ）【図 18】

1 世紀頃の古代ローマの政治家・哲学者・劇作家ルキウス・アンナエウス・セネカのこの本は、ナポリで 1475 年に印刷されており、恐らく同年に装飾も施された。この扉絵装飾はジョヴァンニ・ヴェンドラミンの手に帰されている。これもまたゼーノの蔵書である（*Parole dipinte* (1999: 286, n.112)）。

頁全体は再び文字印刷のための単なる二次元平面へと差し戻されている。左縁では青を背景にした緑の植物文様が渦巻きながら縦に連なっている、その中に立っている着衣の天使が真珠で縁取られた正方形の枠を両手で支えているが、その枠の中では幼子イエスがイニシャル「O」の立体文字と戯れている。頁下部には建築的な台座が描かれており、その中央には真珠の楕円形の中に盾形紋章が入った飾りが吊り下げられている。台座の表面には大理石模様が描かれ、さらに古代風の人物像が左右に配されている。台座の横では、左右ともに小さな若木が数本伸びている。つまり、前

述の1472年のマクロビウスの印刷本【図17】で一度復活した建築的扉絵は、1475年のこの印刷本では選択されていないのである。

とはいえ、この台座がその上にある印刷文字の幅とちょうど同じ幅で描かれていて、さらに台座の周囲に地面と樹木が描かれているため、「建築的扉絵」を見たことのある者の眼には、この台座の上にあたかも「見えない白い石碑」が立っているかのようも見えたかもしれない。二次元と三次元が混在する視覚的実験のようでもあり、不思議なだまし絵的效果が生じている。

以上、1475年までのゼーノの本の装飾を概観し、彼の蔵書の造形語彙の中に「建築的扉絵」がすぐには取り入れられなかったことを確認した。代わりに頻用されていたのは白蔓文様や古代風モチーフとの折衷様式であり、つまりは彼がローマで馴染んでいたような装飾様式であった。ローマで修得した書物装飾の慣習を遵守することは、知識や教養の証明でもあり、広義には人文主義的共同体への帰属意識の表出でもあったからであるだろう。



図18 Padova, Biblioteca Capitolare, Inc.349. セネカ『著作集』1475年マティアス・モラヴォスによりナポリで出版。Lucio Anneo Seneca, *Opera philosophica, Epistolae*, Neapoli, Mathias Moravus, 1475, minato c.1475, c. 1r Giovanni Venderamin.

VI. 結語

1469年にヴェネツィアで初めて印刷された『博物誌』において、印刷出版業者スピラはコロフォンにて、印刷技術の革新性を高らかに謳い、手写本に対する優位性を強調した。画家ヴェンドラミンはおそらくその意図を汲み取り、ラヴェンナ所蔵本の冒頭に、従来の写本装飾の規範から逸脱した新意匠「建築的扉絵」を案出した。これは、いわば、印刷本のための装飾は新たな視覚言語を構築すべきであるという宣言でもあったと思われる。

本稿では、パドヴァとローマを往還しながら多様な書物装飾に触れてきたパドヴァ司教ヤコポ・ゼーノの生涯を、書物装飾との関わりを軸に振り返った。そして1469年のラヴェンナ所蔵本において初めて遭遇したインクynaブラのためのこの新様式「建築的扉絵」が、書物装飾の視覚的経験と様式受容の慣習と照らして、彼にどのように理解され、受容されたのかを検討した。

生涯にわたって培われた書物の装飾様式についての諸知識と実践、パドヴァ的考古趣味を体現する画家ニッコロ・ポラーニの重用、そしてパドヴァでの画家ヴェンドラミンへの「指導」などを総合的に勘案すると、ヤコポ・ゼーノが書物の装飾を選択する際には、人文主義的な知見や伝統的な写本装飾の経験に一致し、書物の内容や用途に相応しい様式であることが重視されていたことが明らかとなる。装飾は、書物に関する知性と教養を視覚的に示す手段であった。彼にとっては、手写本か印刷本かという技術的区分よりも、従来の書物文化の文脈と規範に従うことのほうがはるかに重要だったと考えられる。スピラの声高の印刷術礼賛も、ゼーノにはそれほど響かなかったのだろう。ラヴェンナ所蔵本は当初は「異物混入」のような形で蔵書に加えられたと想像されるのである。

パドヴァに帰還した1469年から1475年までのゼーノ蔵書に見られる装飾は、白蔓文様と古代モチーフの折衷、建築的扉絵の再登場など、単線的な様式の進化ではなく、複数の様式が拮抗し混在する複雑な様相を呈していた。「建築的扉絵」がすぐには定着しな

かったことから、印刷本であるか否かにかかわらず、装飾は依然として写本装飾の文法に準拠し、視覚的伝統に深く根差していたことが示唆される。「建築的扉絵」の登場は、いうなれば、写本と印刷本、装飾と絵画、古代とルネサンスの間に生じるせめぎ合いと共鳴の渦中に投げられた一石であったのだが、それはすぐには大きな波紋を広げることはなかった。バルトロメオ・サンヴィートとガスバレ・ダ・パドヴァのパドヴァのコンビが、ローマ教皇庁という写本制作の一大中心地において白蔓文様を凌駕してパドヴァの「建築的扉絵」を主流にしていくのは、次の教皇シクストゥス四世の治世下（在位 1471-1484 年）であり、図書館長バルトロメオ・プラティナ（就任 1475 年）の庇護のもとにおいてであった（松下（2006））。

「建築的扉絵」はのちの時代に、印刷本のタイトルページにおいて古代建築を模した定型表現へと姿を変え、知の殿堂としての書物という理念を視覚化するデザインとして大量生産されるようになった（Cole（1971））（McFadden Smith（2000））（ゴールドシュミット（2007））。しかしヤコポ・ゼーノが生涯を通じて選び取った書物装飾は、あくまで写本文化に根ざした視覚的教養と人文主義的知見に裏打ちされた、文脈に則した一つ一つの選択の実践であり、個別的に手で描かれるものであった。彼の蔵書に見られる装飾のありようは、技術変革にともなう書物史の大転換期のはじまりにあって、旧来の文化慣習がどのように変容しはじめたのかを示す貴重な最初期例として位置づけられるだろう。

註

01) 「建築的扉絵 *frontespizio architettonico*」は 1469 年に初めて、このラヴェンナ所蔵本と、もう一冊、リウヴィウスのインキュナブラに現れた。現在ウィーンに所蔵されるこのリウヴィウスの一冊は、ローマで出版直後ヴェネツィアに運ばれて「ブットの親方」によって扉絵が描かれた（Titus Livius, *Historiae Romanae decades*, ed. by Johannes Andreae Bishop of Aleria; ISTC il00236000; Vienna, Graphische Sammlung Albertina, Inv.2586）。文献については註 08 を参照。ところで「扉絵」あるいは「タイトルページ」は

印刷本の形式が整えられてから登場したため、正確に言えば 1469 年の当時存在しなかったのだが、本論考では、本文の始まる最初の頁のことを「建築的扉絵」という術語に倣って、便宜上「扉絵」と呼ぶこととする。

- 02) ヤコポ・ゼーノの伝記や書籍収集については Bertalot and Campana (1939), Govi (1951), Mariani Canova (1978), Mariani Canova (2008), De Blasi (2020), *I manoscritti* (2014), Fumian (2014), Bianca (2024) などを参照。
- 03) ボルソ・デステの『聖書』(Bibbi di Borso d'Este) については Toniolo (1995), Toniolo (1997), 京谷啓徳 (2002), Toniolo (2004) などを参照。
- 04) 巻紙には「AVRELII/AGVSTINI/DECIVITATE/ DEI LIBER / PRIMVS / I NCIPIT / FELICITER」と書かれている。また石碑側面には「1459 年 10 月 1 日」(M.CC/CC/LVI/III/ A DI/ P[rimo]/ OT/ VB/ RI/ O), 基台には「司祭ニコロ・ポラーニが私を作った」(PR[esbiter] NICHOLAVS POLANI/ ME FECIT)とある。この本はピウス二世の右腕だったテアーノ司教ニコロ・フォルテグエリのために制作されたが、元々は教皇への献呈写本として始められた可能性が高い (Zabeo (2017:185))。
- 05) 例えばラポ『陳述』【図 07ab】を描いた画家は、カノーヴァによってまず「ヤコポ・ゼーノのローマのプリモ・マエストロ（第一親方）(primo maestro romano dello Zeno)」と名付けられた (Mariani Canova (1978:48))。その後、ルイスシャールトがこの画家をジュリアーノ・アマデイというトスカナ出身の画家と同一視することを提案したが (Ruyschaert (1968:258-267)), さらに後ベッティナーニがアマデイとの類似性を認めた上で「ピッコローミニのミニアトール *Miniature dei Piccolomini*」への帰属を提案する (Pettinati (1990:49)) など、複雑な経緯を辿っている (*Parole dipinte* (1999:264) (*I manoscritti* (2014:712-717)) (Zabeo (2017:228))。このように一般に挿絵画家のアトリビューションは専ら様式による判断が重視されており、困難を極める。加えて、様式鑑定を得意とする目利きの研究者によって同画家の手になると思われる写本グループが識別されてまとめられたとしても、サインを残す習慣が殆どないため、大抵はそこに「～の親方」のような説明調の名称が付けられるばかりである。今回、画家の帰属に触れるとこのような煩雑さで議論の方向を見失いかねないため、わずかな有名挿絵画家を除いて作者の名は特に記さず、帰属をめぐる議論にも触れないままとする。
- 06) その他、ローマには、例えばドイツ由来の写本装飾も一部流入していた。ローマ教皇庁には当時、教皇庁の外交政策にも深く関与したクザーヌス枢機卿をはじめドイツ人聖職者や関係者も出入りしていた。当然ながらイタリア人にも込み入った微細な線描の装飾などを「ドイツ風」として実見する機会はあったものと思われるが、今回はイタリア人文主義の系統の本の装飾についての議論に集中するため、これについては割愛する。
- 07) 「建築的扉絵」の成立と発展については Armstrong (1981),

Andrews (1999), 松下 (2023: 9)などを参照。またラヴェンナ所蔵本の出展歴に関して言えば、この本は1994-95年にロンドンおよびニューヨークで開催された大展覧会(The Painted Page(1994)), 1999年のイタリアのパドヴァでの大展覧会(Parole dipinte (1999))に出品され、どちらにおいても「建築的扉絵」の嚆矢として紹介された。さらに2018年のフランクフルトの展覧会にも出品された(Hinter dem Pergament (2018))。

08) コロフォンは以下の通り。スピラが古代のプリニウスに扮して一人称で語るという珍奇な形式で、手による筆写よりも印刷術の方が読みやすく優れていることが謳われている。「Quem modo tam rarum cupiens vix lector haberet, / Quique etiam fractus pene legendus eram: / Restituit Venetis me nuper Spira Ioannes: / Exscripsitque libros aere notante meos. / Fessa manus quondam moneo: calamusque quiescat, / Namque labor studio cessit: et ingenio. / M. CCCC.LXVIII.」(Pollard (1905: 35))。「読みたいと望む読者も、あまりに希少なので私 [=プリニウスの本] を手に入れることはほとんどかなわなかった。読者にとって、私 [=プリニウスの本] はその上不鮮明ときておりほとんど読まれうることがなかった。しかし近頃、ヨハネス・スピラが私をヴェネツィアの人々に取り戻させた。彼は、「書く真鍮」で [=活版印刷を用いて] 私の書物を書き上げたのである。私は助言する、疲れた手とペンを休めるように、と。というのも、[写字生の] 単なる労働は、学識と才能とに席を譲ったのだから。1469年。」(拙訳、[]内は論者による補足)。

参考文献

ABBREVIAZIONI:

DBI = Dizionario biografico degli italiani, Roma, 1960-

DBMI = Dizionario Biografico dei miniatori italiani, secoli XI-XVI, a cura di M. Bollati, Milano, 2004.

I manoscritti = I manoscritti miniati della Biblioteca Capitolare di Padova, II. I manoscritti dei vescovi Iacopo Zeno e Pietro Barozzi. I manoscritti rinascimentali della Chiesa padovana e di altra provenienza, a cura di G. Mariani Canova, M. Minazzato, F. Toniolo, schede di S. Fumian, Padova, 2014.

Parole dipinte = Parole dipinte. La miniature a Padova dal Medioevo al Settecento, cat. della mostra (Padova, Palazzo della Ragone et al., 21 marzo - 27 giugno 1999), a cura di Giovanna Baldissin Molli, Giordana Canova Mariani, Federica Toniolo, Modena: Panini, 1999.

The Painted Page = The Painted Page. Italian Renaissance Book illumination 1450-1550, exh. cat. (London, Royal Academy of Arts, 27 October 1994 - 22 January 1995; New York, The Pierpont Morgan Library, 15 febbraio - 7 maggio 1995), ed. by J.J.G. Alexander, Munich: Prestel Verlag, 1994.

Alberto Calogero, G. (2018), "Voce. SQUARCIONE, Francesco",

in DBI, vol.93.

Andrews, L. (1999), "Pergamene strappate e frontespizi: i frontespizi architettonici nell'epoca dei primi libri a stampa", in *Arte veneta*, vol.55, pp.7-30.

Armstrong, L. (1981), *Renaissance Miniature Painters and Classical Imagery: The Master of the Putti and His Venetian Workshop*, London: Harvey Miller Publishers.

Armstrong, L. (1992), "6. The Impact of Printing on Miniaturists in Venice after 1469", in *Printing the Written Word: The Social History of Books, c. 1450-1520*, ed. by S. Hindman, Ithaca NY: Cornell University Press, pp.174-202.

Armstrong, L. (1994), "The Hand-Illumination of Printed Books in Italy, 1465- 1515", in *The Painted Page*, pp.35-47.

Armstrong, L. (2020), "Chapter 28. The Decoration and Illustration of Venetian Incunabula. From Hand Illumination to the Design of Woodcuts," in *Printing R-Evolution and Society 1450-1500. Fifty years that changed Europe*, ed. by Cristina Dondi, Edizioni Ca' Foscari, Fondazione Università Ca' Foscari, pp.775-818.

Barzon, A (1950), *Codici miniati*, Biblioteca Capitolare della Cattedrale di Padova, catalogo della mostra, 2 voll., Padua.

Bellinati, C. (1999), "I "libri miniati" della Biblioteca Capotolare di Padova", in *Parole dipinte*, pp.455-458.

Benetazzo, M (1999), "Giovanni Vendramin miniature padovano del tardo quattrocento", in *Padova e il suo territorio*, anno XIV, vol.78, pp.43-45.

Bertalot, L. and Campana, A. (1939), "Gli scritti di Iacopo Zeno e il suo elogio di Ciriaco d' Ancona" in *La Bibliofilia*, Settembre vol. 41, no. 9, pp. 356-376.

Bianca, C. (2016), "Le strade della "sancta ars": la stampa e la curia a Roma nel XV secolo", in *La Stampa Romana nella Città dei Papi e in Europa*, ed.by Cristina Dondi, Adreina Rita, Adalbert Roth, and Marina Venier, Città del Vaticano: Biblioteca Apostolica Vaticana, pp.1-8.

Bianca, C. (2021), *Domicilium sapientiae. Studi sull'Umanesimo Italiano*, eds.by Luca Boschetto, Jeroen De Keyser, Fabio Della Schiava, Clementina Marsico, Gent:Lysa.

Bianca, C., (2024), "Iacopo Zeno e le Vitae Pontificum" in *Église(s) et grands hommes, entre Renaissance et réformes sous la direction de Cécile Caby*, Publications de l'École française de Rome, pp. 103-112.

Cole, G. (1971), "The Historical Development of the Title Page", in *The Journal of Library History (1966-1972)*, October, vol.6, No.4, pp.303-316.

Creighton, M. (1901), *A History of the Papacy from the Great Schism to the Sack of Rome*, vol.4, London: Longmans.

Corbett, M. (1981), "The Architectural Title-Page", in *Motif*, XII, 1964, pp.49-62; Lilian Armstrong, *Renaissance Miniature Painters and Classical Imagery: The Master of the Putti and his Venetian Workshop*, London.

- D'Amico, J. (1983), *Renaissance Humanism in Papal Rome: Humanists and Churchmen on the Eve of the Reformation*, Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Davies, M. (1996), "Humanism in Script and Print in the Fifteenth Century", in *The Cambridge Companion to Renaissance Humanism*, ed. by Jill Kraye, Cambridge Companions to Literature, Cambridge U.P., pp. 47-62.
- Davies, M. (2015), "Gli incunaboli subiacensi: la testimonianza della miniature", in *Subiaco 1465: nascita di un progetto editoriale?*, atti del convegno, Subiaco, 2-3 ottobre 2015, Abbazia di Santa Scolastica: 550° anniversario del primo libro stampato in Italia, Roma: Iter Edizioni, pp.129-143.
- Davies, M. (2016), "From Mainz to Subiaco: Illumination of the first Italian printed books", in *La Stampa Romana nella Città dei Papi e in Europa*, ed. by Cristina Dondi, Adreina Rita, Adalbert Roth, and Marina Venier, Città del Vaticano: Biblioteca Apostolica Vaticana, pp.9-42.
- De Blasi, G. (2020), "Voce. ZENO, Iacopo" in *DBI*, Vol.100.
- D'Elia, A. (2009), *A Sudden Terror: The Plot to Murder the Pope in Renaissance Rome*, Cambridge: Harvard University Press.
- De Nicolò Salmazo, A. (1999), "no.104. Caio Plinio Secondo, *Naturalis Historia*", in *Parole dipinte*, pp.267-270.
- Dix siècles* (1984) = *Dix siècles d'enluminure italienne. VI^e - XVI^e siècles*, catalogo della mostra (Paris, Galerie Mazarine, 8 marzo - 30 maggio 1984), a cura di Y. Zaluska, Paris.
- Estevez, L. (2004), "The Triumph of the Text:" A Reconsideration of Giovanni Vendramin's Architectural Frontispieces, in *Athanasius*, vol.22, pp.15-21.
- Fumian, S. (2014), *Gli incunaboli miniati e xilografati della Biblioteca Capitolare di Padova*, Padova: Istituto per la Storia Ecclesiastica Padovana.
- Govi, E (1951), "La biblioteca di Jacopo Zeno" in *Bollettino dell'Istituto di Patologia del Libro*, 10, pp. 34-118.
- Herman, N. (2011), "Excavating the Page: Virtuosity and Illusionism in Italian Book Illumination, 1460-1520", in *Word & Image*, 27, 2, p. 190-211.
- Hinter dem Pergament* (2018) = *Hinter dem Pergament : die Welt : der Frankfurter Kaufmann Peter Ugelheimer und die Kunst der Buchmalerei im Venedig der Renaissance*, herausgegeben von Christoph Winterer, Frankfurt : Dommuseum, München : Hirmer.
- I manoscritti datati* (2016) = *I manoscritti datati della Biblioteca capitolare di Padova*, a cura di Leonardo Granata, *Manoscritti datati d'Italia; 27*, Firenze: SISMEL Edizioni del Galluzzo., 2016.
- Jacopo da Montagnana* (2002) = *Jacopo da Montagnana e la pittura padovana del secondo Quattrocento : atti delle Giornate di studio*, Montagnana e Padova, 20-21 ottobre 1999 / a cura di Alberta De Nicolò Salmazo, Giuliana Ericani Padova : Il poligrafo.
- La Stampa Romana* (2016) = *La Stampa Romana nella Città dei Papi e in Europa*, ed.by Cristina Dondi, Adreina Rita, Adalbert Roth, and Marina Venier, Città del Vaticano: Biblioteca Apostolica Vaticana.
- Mariani Canova, G. (1978), "Un saggio di gusto rinascimentale: I libri miniati di Jacopo Zeno (1460-1480)", in *Arte Veneta*, XXX, 1978, pp. 46-55.
- Mariani Canova, G. (1994a), "cat.78. Pliny the Elder, *Natural History*", in *The Painted Page*, pp.163-164.
- Mariani Canova, G. (1994b), "The Italian Renaissance Miniature", in *The Painted Page*, pp. 21-34.
- Mariani Canova, G. (1999), "La miniature a Padova dal Medioevo al Settecento", in *Parole dipinte*, pp.13-32.
- Mariani Canova, G. (2008), "Bibliofilia nel Rinascimento a Padova: Jacopo Zeno, la sua biblioteca e il miniatore Giovanni Vendramin", in *Storie di artisti, storie di libri. L'editore che inseguiva la Bellezza. Studi in onore di Franco Cosimo Panini*, Roma: Donzelli Editore, pp.345-361.
- Mariani Canova, G. (2014), "La miniatura nei manoscritti dei vescovi di età umanistica a Padova e il Rinascimento in capitolare", in *I manoscritti*, pp. 487-528.
- McFadden Smith, M. (2000), *The Title-page, its early development 1460-1510*, London: The British Library and Oak Knoll Press.
- Müntz, E., Fabre, P. (1887), *La Bibliothèque du Vatican au XVe siècle, d'après des documents inédits. Contributions pour servir à l'histoire de l'Humanisme*, Paris.
- Palermينو, R. (1980), "The Roman Academy, The Catacombs, and the Conspiracy of 1468", *Archivum Historiae Pontificiae*, 18, pp.117-55.
- Pantarotto, M. (2017), "I manoscritti datati della Biblioteca Capitolare di Padova", a cura di Granata, L., *Sismel-Edizioni del Galluzzo*, Firenze, 2016 (*Manoscritti Datati d'Italia*, 27), note di lettura, in *Il Santo*, LVII, pp. 475-489.
- Pastor, L. (1900), *The History of the Popes from the Close of the Middle Ages: Drawn from the Secret Archives of the Vatican and other original sources*, ed. Frederick Ignatius Antrobus, Vol 4 (London: Kegan Paul, Trench, Trübner and Co. Ltd), pp. 38-66.
- Pettenati S. (1990), "La Biblioteca di Domenico della Rovere", in *Domenico della Rovere e il Duomo nuovo di Torino. Rinascimento a Roma e in Piemonte*, a cura di Giovanni Romano, Torino, pp.41-106.
- Pollard, A.W. (1905), *An Essay on Colophons, with Specimens and Translations*, The Caxton Club, Chicago.
- Print and Power* (2021) = *Print and Power in Early Modern Europe (1500-1800)*, ed. by Nina Lamal, Jamie Cumby, Helmer J. Helmers, Library of the Written Word, volume 92, The Handpress World (editor-in-chief Andrew Pettegree), Leiden and Boston : Brill.
- Ruyschaert, J. (1968), *Miniaturistes «romains» sous Pie II, in Enea Silvio Piccolomini Papa Pio II. Atti del Convegno per il*

- quinto centenario della morte e altri scritti raccolti da Domenico Maffei*, Siena, pp. 245-282.
- Sachet, P. (2025), "The Papacy and Printing (1464-1633): Prohibiting and Promoting", in *The Cambridge History of the Papacy, III: Civil Society*, ed. by J. Rollo-Koster, R. A. Ventresca, M. H. Eichbauer, and M. Pattenden, Cambridge U.P., pp. 656-680.
- Sean Danielle, K. (1999), The origin and dissemination of the fifteenth-century manuscript illumination motif, Bianchi Girari, M.A. (Master of Arts), First Advisor: Mustari, Louis Frank, Graduate Research Theses & Dissertations. 6044. Northern Illinois University.
- Subiaco 1465* (2015) = *Subiaco 1465 : nascita di un progetto editoriale?*, atti del convegno, Subiaco, 2-3 ottobre 2015, Abbazia di Santa Scolastica : 550° anniversario del primo libro stampato in Italia, Roma: Iter Edizioni.
- Toniolo, F. (1995), "Taddeo Crivelli: il maggior miniatore della Bibbia di Borso d'Este", in *Bollettino d'arte*, ser. 6, 80 (1995), 93/94, pp. 159-180.
- Toniolo, F. (1997), "La Bibbia di Borso d'Este: Cortesia e magnificenza a Ferrara tra Tardogotico e Rinascimento", in *La Bibbia di Borso d'Este. Commentario al codice*, II, Modena, pp. 295-497.
- Toniolo, F. (2004), voce. Crivelli, Taddeo, in *DBMI*, pp. 188-192.
- Torch, B.J. (2024), *Living in a World of Words: humanist friendships and book culture in Quattrocento Rome, 1440-1480*, Ph.D. Theses, Graduate Program in History, York University, Toronto, Ontario.
- Toscano, G. (1999), "Gaspere da Padova e la diffusione della miniatura «all'antica» tra Roma e Napoli", in *Parole dipinte*, pp. 523-531.
- Toscano, G. (2009), *Libri umanistici e codici all'antica tra il Veneto, Roma e Napoli. Note su Andrea Contrario e Bartolomeo Sanvito*, in *Società, cultura e vita religiosa in età moderna. Studi in onore di Romeo De Maio*, a cura di L. Gulia, I. Herklotz, S. Zen, Sora, pp. 497-526.
- Vedere i classici* (1996) = *Vedere i Classici. L'illustrazione libraria dei testi antichi dall'età romana al tardo Medioevo*, catalogo della mostra, Città del Vaticano, Salone Sistino, Musei Vaticani, 9 ottobre 1996 - 19 aprile 1997, a cura di M. Buonocore, Roma.
- Zabeo, L. (2014), "«Presbyter Nicholas Polani»: un miniatore alla corte dei papi", in *Rivista di Storia della miniatura*, 18, pp. 118-131.
- Zabeo, L. (2017), *I libri dei papi umanisti. La miniatura a Roma nel primo Rinascimento*, tesi di dottorato, Tutor: Andrea De Marchi, Università degli Studi di Firenze.
- Zippel, G. (1904-1911), *Le Vite di Paolo II di Gaspere da Verona e Michele Canensi*, a cura di G. Zippel, Città di Castello (*Rerum Italicarum Scriptores*, III, 16).
- 京谷啓徳 (2002) 「良き君主ボルソ・デステ『ボルソ・デステの聖書』の機能と装飾」『ボルソ・デステの聖書』辻佐保子日本版監修, エステンセ図書館蔵本ファクシミリ版日本版解説2, 岩波書店.
- ゴールドシュミット, E.P. (2007) 『ルネサンスの活字本:活字, 挿絵, 装飾についての三講演』高橋誠訳, 国文社. (Goldschmidt, E. P. (1950), *The Printed Book of the Renaissance: Three Lectures on Type, Illustration and Ornament*, Cambridge University Press.)
- 松下真記 (2006) 「マンテーニャと15世紀後半パドヴァ写本一紙の表象をめぐる一」『人間文化論叢』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科, 第8巻, 123-134頁.
- 松下真記 (2007) 「Littera Mantiniana 再考: 15世紀パドヴァの大文字書体の変革とマンテーニャ, フェリチアーノ」『人間文化論叢』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科, 第9巻, 161-173頁.
- 松下真記 (2023) 「1470年代前半のヴェネツィアのスピラ工房: インキュナブラ装飾の効率化のためのハンコの利用」『文明』東海大学文明研究所, 第32号, 1-14頁.
- 松下真記 (2024) 「1469年スピラ工房印刷のプリニウス『博物誌』に描かれる白蔓文様」『文明』東海大学文明研究所, 第34号, 13-26頁.
- 松下真記 (2026 予定) 「羊皮紙に羊皮紙を描く一画家ジョヴァンニ・ヴェンドラミンによるプリニウス『博物誌』扉絵一」『思索のアジュール』天野知香先生退官記念論文集編集委員会, 森話社, 頁未定.

図版典拠一覧 (All retrieved September 20, 2025.)

※図2, 4, 8, 9, 11の写真にはヴァチカン図書館所蔵の「蔵書透かし」が入っています。

図01 *Parole dipinte*, n.104, p.269.

図02 Vat.lat.3704 | DigiVatLib

https://digi.vatlib.it/view/MSS_Vat.lat.3704?ling=ja

図03 Vita Caroli Zeni - LUX

<https://lux.collections.yale.edu/view/object/b6e9e755-64c1-41d5-b9c5-11a4553e937c>

図04 Vat.lat.3703 | DigiVatLib

https://digi.vatlib.it/view/MSS_Vat.lat.3703

図05 *Parole dipinte*, n.101, p.262.

図06 *Parole dipinte*, n.103, p.266.

図07 *Parole dipinte*, n.102, p.264.

図08 Vat.lat.7628 | DigiVatLib

https://digi.vatlib.it/view/MSS_Vat.lat.7628?ling=ja

図09 Vat.lat.547 | DigiVatLib

https://digi.vatlib.it/view/MSS_Vat.lat.547

図10 Zabeo (2017), fig.193, p.426.

図11 Chig.H.VII.229 | DigiVatLib

https://digi.vatlib.it/view/MSS_Chig.H.VII.229

図12

Enea Silvio Piccolomini, Liber epistolarum saecularium. | Gallica

<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b84527756/f17.item>

図13

Paris. Bibliothèque Sainte-Geneviève, Ms. 218 | Biblissima

<https://portail.biblissima.fr/fr/ark:/43093/mdata37fc75276b6cff6c2a463129bbdbadd6b59116a3>

図14 *Parole dipinte*, n.107, p.276.

図15 *Parole dipinte*, n.106, p.274.

図16 *Parole dipinte*, n.109, p.280.

図17 *Parole dipinte*, n.105, p.272.

図18 *Parole dipinte*, n.112, p.286.

本誌への投稿について

1. どなたでも自由に投稿できます。
2. 原稿は本誌の目的（『文明』創刊にあたって」（創刊号に掲載）をご参照下さい）に沿った論文または研究ノートなどで、未発表のものにかぎります。
3. 原稿の体裁
 - ①邦文の場合：20,000 字以内（研究ノートは16,000 字以内），原則として図表は刊行の際のスペースを本文の字数相当に算入してください。他に英文アブストラクト 300 ワード。
 - ②英文の場合：8,000 ワード以内（研究ノートは6,400 ワード以内），原則として図表は刊行の際のスペースを本文のワード数相当に算入してください。他に邦文抄録 500 字または英文アブストラクト 300 ワード。いずれも、本誌の「執筆要項」に沿った形でご提出下さい。
4. 投稿原稿の採否は、編集委員会の委嘱する査読委員の審査に基づき編集委員会が決定します。原稿は採否にかかわらずお返しいたしません。
5. 発行：年1～2回
6. 「執筆要項」は、東海大学文明研究所のホームページより、ダウンロードできます。

東海大学文明研究所

〒 259-1292 神奈川県平塚市北金目 4-1-1

連絡先：湘南校舎 F 館 2F 文明研究所

電話：0463-58-1211 (EXT 3261, 4426)

E-mail：bunmei@tsc.u-tokai.ac.jp

文明
Civilizations

No.36 2025

編集 委員長 田中彰吾
委員 篠原聡
服部泰
山花京子
吉田晃章
五十嶋みゆき

発行日 2026年3月31日
発行者 田中彰吾
発行所 東海大学文明研究所
〒259-1292 神奈川県平塚市北金目4-1-1
Telephone : 0463-58-1211 (EXT 3261, 4426)
E-mail:bunmei@tsc.u-tokai.ac.jp

製作 東海教育産業株式会社
〒259-1143 神奈川県伊勢原市下粕屋164
Telephone : 0463-92-1881

印刷 株式会社ビー・アンド・アイ

※本誌からの無断転載を禁じます。

Civilizations

No.36 **2025**

Contents

iii

Preface

Teruaki Yoshida

1

Genealogy of Civilization Theory (1): Civilization Studies at Tokai University's Institute of Civilization Research

Yoichi Hirano, Toru Hattori, Tomoko Nakamura, Sei Watanabe

19

Jacopo Zeno, Bishop of Padua, and the Architectural Frontispiece

Maki Matsushita